

南琉球宮古語城辺町新城方言の文法概説

九州大学大学院 人文科学府
言語・文学専攻 言語学・応用言語学専修
2LT17204W
2017（平成 29）年 4 月入学
2019（平成 31）年 1 月提出
王 丹凝

要旨

本論文は、南琉球宮古語城辺町新城方言（以下、新城方言）の文法概説である。

本論文は全部で 11 章からなる。第 1 章では、本論文の研究対象となる新城方言が琉球諸語の中でどのような位置にあるか、またどのような集落で話されているのかという概要を述べる。第 2 章は音韻論であり、子音体系、母音体系、音節構造、音韻規則を記述する。第 3 章で形態的な単位や各品詞の定義を述べ、第 4 章から第 10 章までは各品詞（機能類も含む）の基本構造についてそれぞれ記述する。第 11 章では文の構造を記述する。

目次

要旨	i
目次	ii
1 方言の概要	1
1.1 地理・系統	1
1.1.1 地理	1
1.1.2 系統	2
1.2 産業・教育	3
1.3 人口・話者数	3
1.4 先行研究	3
1.5 話者情報	3
2 音韻論	5
2.1 音素	5
2.1.1 子音	5
2.1.2 半母音	7
2.1.3 母音	8
2.2 単純語の音節構造・音素配列	11
2.2.1 可能な音節の型と条件	11
2.2.2 モーラ：	12
2.2.3 最小語制限	13
2.3 /ž/について	13
2.3.1 宮古語における/ž/	13
2.3.2 新城方言における/ž/	14
2.4 主な形態音韻規則	14
2.4.1 連濁	14
2.4.2 母音始まりの助詞に限る音韻規則	15
2.4.3 /i/挿入規則	16
2.4.4 鼻子音連續削除規則	16
2.4.5 上り二重母音融合規則	16
2.4.6 動詞形態論に固有の音韻規則	17
3 記述の諸単位	19
3.1 形態論の諸単位	19
3.2 品詞一覧	20
3.2.1 名詞	20
3.2.2 動詞	21
3.2.3 形容詞	21
3.2.4 連体詞	22
3.2.5 助詞	22
3.2.6 間投詞	23
3.2.7 副詞	23
3.3 文の基本構造	23
3.3.1 主語と目的語	23

3.3.2 格組織.....	24
3.3.3 主節平叙文の語順.....	24
4 名詞類.....	26
4.1 人称代名詞.....	26
4.1.1 一人称.....	26
4.1.2 二人称.....	27
4.2 再帰代名詞.....	28
4.3 名詞.....	28
4.4 数詞.....	28
4.5 名詞形態論.....	30
4.5.1 指小辞-gama.....	30
4.5.2 複数接辞-taa;-nukjaa.....	30
5 動詞の構造.....	32
5.1 動詞語幹の分類.....	33
5.1.1 クラス 1.....	33
5.1.2 クラス 2.....	36
5.1.3 クラス 3.....	37
5.2 屈折形態論.....	38
5.2.1 定動詞.....	39
5.2.2 副動詞.....	41
5.3 存在動詞とコピュラ動詞.....	43
5.3.1 存在動詞.....	44
5.3.2 コピュラ動詞.....	44
6 PC 語.....	46
6.1 動詞として.....	46
6.2 複合名詞として.....	47
6.3 準複合名詞として.....	47
6.4 形容詞として.....	48
7 名詞句.....	49
7.1 名詞句の基本構造.....	49
7.2 格助詞.....	49
7.2.1 主格・属格.....	50
7.2.2 対格.....	53
7.2.3 与格と方向格.....	54
7.2.4 具格.....	59
7.2.5 共格.....	59
7.2.6 比較格.....	59
7.2.7 奪格.....	60
7.2.8 限界格.....	60
7.3 修飾部.....	60
7.3.1 連体修飾構造（現在肯定形）.....	61
7.4 主要部.....	62
8 述語の構造.....	64
8.1 動詞述語.....	64

8.1.1 主動詞と補助動詞.....	64
8.2 名詞述語(コピュラ文).....	68
9 助詞類.....	69
9.1 取り立て助詞.....	69
9.1.1=mai 「も」	69
9.2.2=cjaai 「だけ, ばかり」	70
9.3 情報構造助詞.....	70
9.3.1 主題助詞.....	70
9.3.2 焦点助詞.....	71
9.4 モーダル助詞.....	72
9.4.1=pazi 「はず」	72
9.5 接続助詞.....	72
9.5.1 逆接=suga.....	72
9.5.2 引用=tti	73
9.6 終助詞.....	73
9.6.1 疑問.....	73
9.6.2 伝聞=ca 「そうだ」	74
10 機能類：疑問詞・指示詞.....	75
10.1 疑問詞.....	75
10.2 指示詞.....	76
11 構文論.....	78
11.1 文タイプ.....	78
11.1.1 平叙・疑問・命令	78
11.2 肯定文と否定文.....	79
11.2.1 動詞述語の肯定・否定	79
11.2.2 名詞述語の肯定・否定	79
11.3 存在文.....	79
11.4 受動・使役	80
11.4.1 受動	80
11.4.2 使役	80
11.5 情報構造	81
参考文献.....	82
略号一覧.....	83
謝辞	85

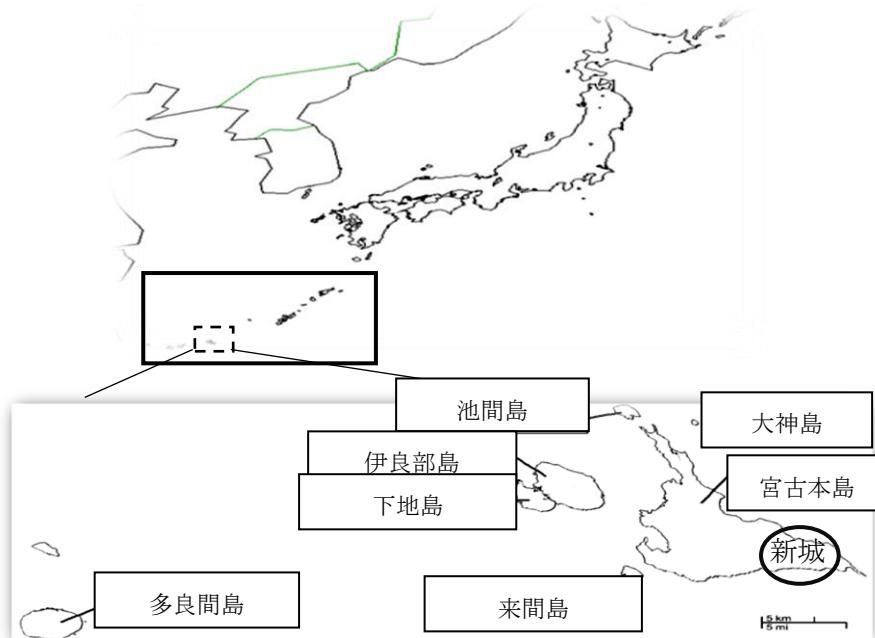
1 方言の概要

本章では、新城方言の概要を述べる。1.1 節で地理・系統を、1.2 節で産業・教育を、1.3 節で人口・話者数を述べる。続く 1.4 節で先行研究をまとめ、1.5 節では話者情報を提示する。

1.1 地理・系統

1.1.1 地理

琉球諸語は、喜界島から沖縄（およびその属島）にかけて話されている北琉球語と、先島諸島（宮古列島、八重山列島）で話されている南琉球語の二つに区分される。南琉球語はさらに宮古語、広域八重山語（与那国語を含む）に分かれる。筆者は南琉球語に属する、沖縄県宮古島市旧城辺町新城で話されている新城方言を中心に調査を行っている。地図 1-1 に日本列島における琉球列島の位置（太枠）、宮古群島の位置（破線枠）、および破線枠の拡大図で新城地区の位置（丸枠）を示す。



地図 1-1.琉球列島と新城地区の位置(Pellard 2009 に基づき、筆者が作成)

1.1.2 系統

琉球諸語は日本語の姉妹言語であり、ともに日琉諸語を構成する。前節で述べた通り、琉球諸語は北琉球語と南琉球語からなる。

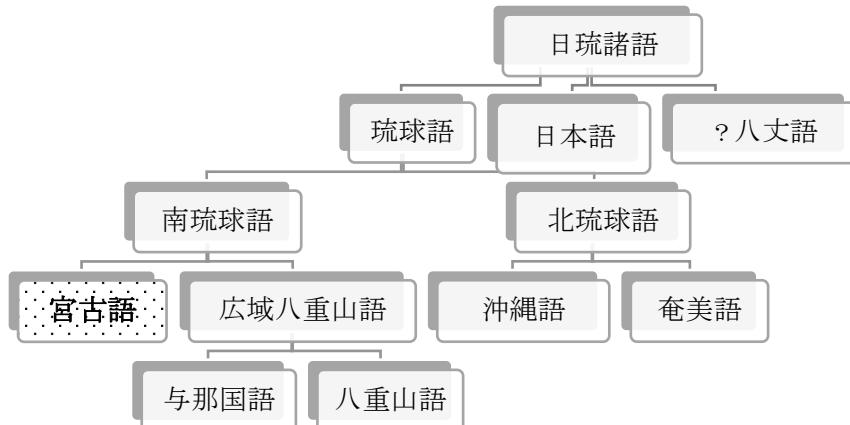


図 1-1.日本語族系統図(Pellard 2013:3 に基づき、筆者が作成)

宮古語諸方言は、宮古島、伊良部島、池間島、大神島、来間島で話され、島ごとの方言差のみならず、個々の島の内部においても方言差が存在する。その下位分類については研究者の間に様々な見解があるが、本論文ではかりまた(2002)の分類を引用する(図1-2)。

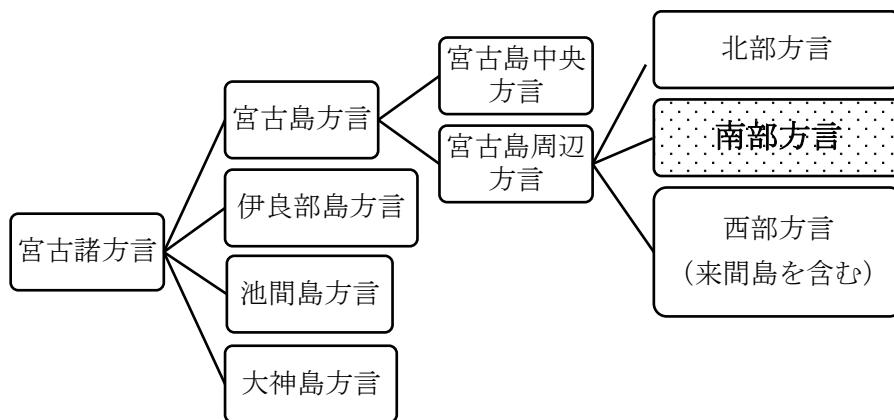


図 1-2. 宮古諸方言の系統(かりまた 2002:45 に基づき、筆者が作成)

かりまた(2002)によると、宮古島中央方言は平良市の市街地を中心とした方言グループであり、周辺方言は、平良市狩俣、島尻などの島の北部の方言、城辺町保良、砂川、上野村新里、宮国などの南部方言、来間島を含む下地町洲鎌、上地などの西部方言に分かれる。筆者の研究対象である新城方言は宮古島方言の南部方言に属する。

1.2 産業・教育

城辺町は沖縄県宮古島の南東部に位置し、第1次産業が主で、特産品としては黒糖、泡盛、もずく、海ぶどう、マンゴーなどがある。農業以外に近年では観光産業も発展しており、東平安名崎、マイガー断崖などの有名観光地が存在する。

新城地域にある学校は、福嶺幼稚園、福嶺小学校、福嶺中学校のみであり、とりわけ大学進学の際には宮古島を離れる必要がある。

1.3 人口・話者数

宮古島本島は、平良市、城辺町、上野村、下地町の4市町村からなる。平成29年12月末日の人口数（外国人を含む）は、54,442人（そのうち、平良地区37,273人、城辺地区5,896人、下地地区3,013人、上野地区3,047人、伊良部地区5,213人）で、世帯数が26,304世帯となっている。¹新城は城辺町の最大の集落であり、人口（外国人を含む）は平成29年12月末日時点では457人であり、世代数が253世代である。

方言話者数に関して、自治体や政府の公式なデータは存在しないが、他の琉球諸語危機と同じく、話者はほぼ地域在住もしくは出身の60代以上に限られるため、上記の人口よりも大幅に下回ると予測される。筆者の調査した話者の話によると、方言を話せる若者はほとんどおらず、方言を聞いてわかる若者も少なくなりつつあるとのことである。よって方言の維持継承は極めて難しい状況にある。話者の高齢化を考慮すると、今後10年以内に調査が難しくなることは確実である。

1.4 先行研究

これまでの宮古語の記述研究は北西部地域（伊良部島、池間島、大神島、狩俣、平良、西原）方言が中心を占め（Shimoji 2008, Pellard 2009, 林 2013, 衣畠・林 2013など）、東部方言である新城方言は先行研究が極めて乏しい。新城方言のまとまった先行研究は、卒業論文が2報（高橋 2018, 田平 2018）のみである²。本論文は、これらの記述も踏まえながら、文法体系を広く扱い、基礎的な記述を示す文法概説であり、当方言の文法概説としては初めての研究である。

1.5 話者情報

本論文に協力いただいた話者は女性2人と男性1人の合計3名である（表1-1）。いずれも方言研究に肯定的な姿勢を持つ話者である。

¹ 宮古島市ホームページ（最終閲覧日：2019年1月6日）<https://www.city.miyakojima.lg.jp/>

² 辞書については、新城地区を含む旧城辺町の方言全体を扱った『城辺町スマフツ辞典（上下）』（城辺町教育委員会）がある。

表 1-1.話者情報（高橋 2018 を参考）

話者氏名	性別	年代	詳細情報
SE	女性	70代	宮古島市城辺新城出身。幼少時代の日常生活では方言を中心には話していた。高校進学を期に宮古島平良地域にて学生生活を送り、卒業後約17年を本州で過ごす。30代で宮古島に戻った際は方言が薄れていたが、現在は発話も聞き取りも堪能である。宮古島市城辺福里在住。現在は学童保育施設の運営に携わりながら子供たちに方言を教える活動を行っている。
TS	男性	60代	宮古島市城辺新城出身。幼少時代は方言が中心。高校は平良地域に通学。卒業後約10年を沖縄本島、東京で過ごし20代で宮古島に復帰。その後長期間は平良地区に住むが、新城方言は堪能で、内省が他方言と混乱することもない。現在も宮古島市平良地域在住。
TN	女性	60代	宮古島市城辺新城出身。幼少時代は方言を中心に話し、実家の雑貨屋の手伝いで上世代との交流の中で方言をよく使っていた。高校は平良地域に通学、卒業後約4年を名古屋で過ごす。20代で宮古島に戻り、現在は平良地域に在住。

以下、例文に振っているグロスは4段式を採用し、そのうち1番上の段は表層形（話者が発音したままの形）、2番目の段は基底形、3番目の段はグロス、4番目の段は日本語訳である。なお、先行研究の例文を引用する場合、筆者の方針によって表記を変える。

2 音韻論

本章では、まず2.1節で音素目録を示す。続いて2.2節では単純語の音節構造と音素配列の問題点について述べる。続く2.3節では/ž/について先行研究を踏まえながら述べ、2.4節で音韻規則を記述する。以下の記述において、[] は音声表記、//は表層形で、///は基底形であることを表す。

2.1 音素

新城方言の音素は、口腔内の積極的な狭めの有無、音節核のみに立つか否かによって、子音、半母音、母音という3つのグループに分類できる。そのうち、子音はさらに、音韻的な有声と無声の対立の有無を基準（つまり、連濁できるか否かといった基準；2.1.1に後述）に従い、阻害音と共鳴音という2つのクラスに分かれる。

表 2-1. 音素の分類

音素のクラス		積極的な狭め	音節核のみ	音韻的な有声と無声の対立
子音	阻害音	+	-	+
	共鳴音	+	-	-
半母音		-	-	-
母音		-	+	-

以下、2.1.1節で子音、2.1.2節で半母音、2.1.3節で母音について述べる。

2.1.1 子音

新城方言の子音音素は以下の表2-2にまとめている（便宜上、/ts/を/c/、/dz/を/z/、/z/を/ž/と表示する。）それらの子音は、音韻的に①有声・無声の対立を有する阻害音（破裂・摩擦・破擦）と、②有声・無声の対立がない共鳴音の2つのクラスに分けられる。阻害音に関しては、表2-2において、無聲音を上段に、有聲音を下段に示している。

この区別は、音素配列上の制限を記述する上で重要である。音韻的に、阻害音は有声と無声の対立があり、有声阻害音は重子音化できず、また複合語の非語頭語幹にこれが含まれる場合、当該語幹の連濁を阻止する。共鳴音は長短の対立を持ち、阻害音と異なり、語末のコーダに立ちうる（2.2で後述）。

表 2-2.子音音素

		両唇	唇歯	歯茎	軟口蓋	声門
阻害	破裂	p		t	k	
		b		d	g	
	摩擦		f	s,c		h
共鳴			v	z		
	鼻音	m		n		
	口音			č,r		

2.1.1.1 /v/

/v/は/f/と有声・無声のペアをなすため、阻害音に分類されるが、共時的な分類が難しい部分があり、共鳴音としてのふるまいも見せる。以下に例を挙げながら述べる。

まず、/v/が阻害音としてふるまう点は2つである。

一番目は、連濁において/f/と交替することである。以下(2-1)に示すように、ffa「子供」が複合語の後半部分に立つ場合、連濁を起こし、ffはvvになる。連濁は阻害音の無声と有声ペアの交替現象であるから、/f/と/v/は阻害音であると言える。

(2-1)//midun//+ffa//(女+子供)→/midun+vva/ [midu_N v:a] 「娘」

二番目は、音声上、重子音の時は有声摩擦音[v]で実現することである(2-2)。

(2-2)/avva/ [av:a] 「油」

/v/ が共鳴音としてふるまう点は3つ挙げられる。

一番目は、語中に/v/があっても、連濁を阻止しないことである。以下(2-3)に示すように、pav「蛇」が複合語の後半部分に立つ場合、ライマン法則に従わず、/v/ があるにも関わらず、pがbになる。

(2-3)//tin + pav// (天+蛇)→ /tin+bav/ [timbav] 「虹」

二番目は、共鳴音の/m, n/と同様、準音節(2.2に後述)に立つことができる(2-4)。

(2-4)/vsi/ [vsi] 「臼」

三番目は、音声上、上記の(2-2)のような重子音以外の環境では接近音[v]で実現することである(2-5) (2-6)。

(2-5)/pav/[pav] 「蛇」

(2-6)//naa=u nav//→/naaju nav/[na: ju nav] 「縄をなう」

以上を踏まえ、本論文では、音素として/v/を阻害音と分類し、接近音（共鳴音）[v]という異音を持つと分析する。

2.1.1.2 /s//c//ž//z/

/s/, /c/, /ž/, /z/は前舌狭母音[i]の前で口蓋化し、音声上、それぞれ[ç], [tç], [z], [dз]として実現する(2-7)。

(2-7)

- a. /asi/ [açi] 「お昼」
- b. //muc-i-i kuu//(持つ-THM-SEQ 来る.IMP)→/muci kuu/ [mutçi ku:] 「持つてこい」
- c. //iži-i-i kuu//(入れる-THM-SEQ 来る.IMP) →/ ižii kuu / [izi ku:] 「入れてこい」
- d. /zin/[dзin] 「お金」

2.1.1.3 /n/

/n/ は音節のコーダとして現れる場合、後続の子音の調音位置によって同器官的に同化されて発音する（すなわち、両唇音の前に[m]として発音し、軟口蓋音の前では[ŋ]として実現する。また、語末音節のコーダでは、[n]になる）(2-8)。

(2-8)

- a. //tinbav//→/timbav/[timbav] 「虹」
- b. //kangiru//→/kangiru/[kaŋgiru] 「背負う」
- c. //zin//→/zin/[dзin] 「お金」

2.1.2 半母音

/j/ は後舌母音 (/a/,/u/) の前に現れる(2-9)。

(2-9)

- a. /jaa/[ja:] 「家」
- b. /jusarabi/ [jusarabi] 「夕方」

/w/は母音 /a/ の前のみに現れる。宮古祖語では、琉球祖語の*/w/が語頭で/b/になっているため、例はごくわずかである(2-10)。

(2-10)

- a. /waa/[wa:] 「豚」
- b. /waakaa/[wa:ka:] 「危ない」

2.1.3 母音

新城方言の母音音素表は以下の表 2-3 に示す。

表 2-3.母音音素

	+前舌	-前舌, -後舌	+後舌
+狭	i	i	u
-狭, -広	(e)		(o)
+広			a

新城方言では、母音は /a,i,i,u,e,o/ の 6 つが認められるが、このうち /i/ は限られた子音とのみ共起する。/e,o/は一部の表現（応答表現、借用語と融合形）のみで現れるためカッコに入れている。

以下に特筆すべき /i/ (2.1.3.1), /e,o/(2.1.3.2), 長母音(2.1.3.3), 二重母音(2.1.3.4), 無声化(2.1.3.5) について述べる。

2.1.3.1 /i/

/i/ は、オンセットなしで立つことができず、かつオンセットが摩擦音（/h/ を除く）に限られる。/i/ は、他の母音と異なり、基底では存在せず、異なる阻害音からなる子音連続(2-11a)や、阻害音と鼻音からなる子音連続(2-11b)、摩擦子音終わりの語(2-11c,d)を避けるために、/i/ 挿入規則という音韻規則によって挿入されるものと解釈できる (2-11)。

(2-11)

- a. //sta//→/sita/ 「舌」
- b. //cna//→/cina/ 「綱」
- c. //muzikas//→/muzikasi/ 「難しい」
- d. //pjaa-f//→/pjaa-fi/ 「早く」

挿入母音とする理由は、母音始まりの助詞の形態音韻的ふるまいに関するものである。宮古語一般において見られるように、新城方言では、以下の表 2-4 に示すように、=a（主題助詞「～は」）や=u（対格助詞「～を」）といった母音始まりの助詞が名詞句に付く場合、名詞句の語幹末の音素によって、以下の形態音韻的交替が見られる（表 2-4）。（=は接語境界を表す）。

表 2-4. 母音始まりの助詞が後接した場合の形態音韻論的交替

		主題//=a//	対格//=u//	例	
	語幹末	=a	=u	主題助詞	対格助詞
a.	-C	-C _i =C _i a	C _i =C _i u	/kanamaz=za/ (頭は)	/kanamaz=zu/ (頭を)
b.	-V ₁ V ₂	-V ₁ V ₂ =ja	-V ₁ V ₂ =ju	/macigii=ja/ (まつげは)	/macigii=ju/ (まつげを)
c.	-X (それ以外)	-X=a	-X=u	/pana=a/ (花は)	/pana=u / (花を)

「頭」を意味する[kanamazi]の基底形を//kanamazi//と見るか//kanamaz//と見るかについて、[kanamazi]に後続する主題助詞=a または対格助詞の形式は=za, =zu となる(2-12)。

- (2-12) a. *kanamazza jamjuu.*
 kanamaz=a jam-i ur- ϕ .
 頭=TOP 痛む-THM+ PROG-NPST
 「(胃ではなく,) 頭は痛い。」
- b. *kanamazzu nadiru.*
 kanamaz=zu nadi-ru.
 頭=ACC なでる-IMP
 「頭をなでる。」

上記を踏まえ、表 2-4 の(a)の通り、基底形//kanamaz//とし、//kanamaz//+//u//から派生する際、重子音化規則が適用され(2.4.2.1を参照)、/kanamaz=zu/になる。すなわち、iは基底形に存在せず、表層形にのみ現れる。

もし、基底に母音が存在すると見て、すなわち、//kanamazi//と見ると、表 2-4 の(c)が適用され、*/kanamazi=u/が期待されるが、そうならない。

2.1.3.2 /e,o/

/e,o/は応答表現、借用語と融合形のみで現れる。

- (2-13) /e/
 a. (子守唄の歌詞)
 //buu=u mm-i// (麻の糸=ACC 紡ぐ-IMP) →/buuju mme/ 「麻の糸を紡ぐ」
 b. (借用形) /terebi/ 「テレビ」

- (2-14) /o/
 a. (応答表現:呼びかけ) /oi/ 「おい」
 b. (借用語) /reizooko/ 「冷蔵庫」, /kookoo/ 「高校」
 c. (融合形) //avva=u// (油=ACC) →/avvoo/ [avvo:] 「油を」

2.1.3.3 長母音

筆者の手持ちのデータに関する限り、中舌母音 /i/ を除きすべての母音に長母音が観察される。長母音は短母音音素の連続と見なす。その妥当性について 5.1.1 に述べる。

(2-15)

- a. /uja/ 「父」 vs. /jaa/ 「家」
- b. /tuž/ 「鳥」 vs. /tuuž/ 「通る」
- c. /midun/ 「女」 vs. /mii/ 「見る」

2.1.3.4 二重母音

新城方言では、/ai/, /ui/, /au/といった3つの下り二重母音(descending diphthong, 口の開きが大きいほうから小さいほうへ変化する二重母音のことを指す)が観察される(2-16)。そのうち、/au/は、話者によって融合して[o:]として発音されることもある。

(2-16)下り二重母音 : /ai/, /ui/, /au/

- a. /janai/[janai] 「夜」
- b. /kagi+gui/[kagi gui] 「きれいな声」
- c. /taukjaa/[taukja:] 「一人」
- d. //avva=u// (油=ACC) →/avvoo/ [avvo:] 「油を」

/i-a/, /i-u/といった上り二重母音(ascending diphthong, 口の開きが小さいほうから大きいほうへ変化する二重母音のことを指す)は、音韻的に形態素境界を跨いだものにのみ許容され、音声的にそれぞれ[ja:][ju:]という融合した発音をする。

(2-17)上り二重母音 :

- a. //kari=a// (彼=TOP)→/karjaa/[kačja:] 「彼は」
- b. /idi- ur- φ // (出る PROG-NPST) →/idjuu/[idju:] 「出ている」

2.1.3.5 無声化

前舌狭母音 /i/ は、(2-18)のように、無声子音にはさまれた時や語末に立つ時は常に無声化される。

(2-18)/pisii~pisi/[p̥isii~p̥isi] 「寒い」

2.2 単純語の音節構造・音素配列

2.2.1 可能な音節の型と条件

単純語の音節構造は、①準音節、②語頭音節、③非語頭音節といった3つの部分に分けられる。「準音節」(下地2018)は、通常の音節とは分布や構造の点で異なり、語の初頭位置にのみ見られる特殊な音節で、成節子音である。下地(2018)によると、こういうような音節は、歴史的には母音の弱化・消失から生じたという。

単純語の音節構造は(2-19)に示す (Rは成節子音、Cは子音、Vは母音、Gは半母音を指す)。

(2-19) (準音節+) 語頭音節 (+非語頭音節_{1...n})

$(R_i (R_i)) . ((C_i (C_i)) (G) V_1 (V_2) (C_{oda}))$

音節構造に対する制限は以下に示す。

(2-20) 準音節は成節子音であり、鼻音 /m/, /n/ と /v/ が立つ(a,b,c)。準音節に立つ子音は最大2つまでであり、その際2つの成節子音連続RRは同一子音でなければならない。現時点で、成節子音連続RRの例はmmのみ観察される(d)。

- a. /m.ci/ 「道」 (R.CV)
- b. /n.zan.kai/ 「どこに」 (R.CVC.CVC)
- c. /v.si/ 「臼」 (R.CV)
- d. /mm.na/ 「みんな」 (RR.CV)

(2-21) 語頭音節は最大2子音連続と半母音からなるオンセットと单一子音のコーダを持ちうる。頭子音連続CCは共鳴音の同一子音(f)か無声阻害音(h)からなる。

$\#((C_i)C_i)(G)V_1(V_2)(C_{oda})$

- a. /mi.dun/ 「女」 (CV.CVC)
- b. /maa.sjuu/ 「燃やしいている」 (CV_iV_i.CGV_iV_i)
- c. /dai.ban/ 「大きい」 (CV₁V₂.CVC)
- d. /ja.ra.bi/ 「子供」 (GV.CV.CV)
- e. /juuž/ 「祝い」 (GVVC)
- f. /mma/ 「おいしい」, /ffa/ 「子供」 (CCV)
- g. /tin.bav/ 「虹」 (CVC.CVC)
- h. /ssan/ 「知らない」 (CCVC)
- i. /sjaa.ka/ 「朝早い」 (CGVV.CV)

(2-22) 非語頭音節は单一子音オンセットを義務的に持ち、单一子音コーダを持ちうる。

$\dots C(G)V_1(V_2)(C_{oda}) \text{ or } GV_1(V_2)(C_{oda})$

- a. /pž.tu/ 「人」 (CV.CV)
- b. /tin.bav/ 「虹」 (CVC.CVC)
- c. /sin.sii/ 「先生」 (CV.CVV)
- d. /buuž.buuž/ 「猟狩り」 (CVVC.CVVC)

- e. /ja.du.mu.rja/ 「蜘蛛貝」 (CV.CV.CV.CGV)
 - f. /n.kjaan/ 「元」 (R.CGVVC)
 - g. /ma.ju/ 「貓」 (CV.GV)

(2-23) 準音節 + 語頭音節は子音連続 R.C (以下では a), RR.C が観察される(b)。

- a. /m.ci/ 「道」 (R.CV)
 - b. /mm.na/ 「みんな」 (RR.CV)

(2-24) 語末のコーダは共鳴音/m/, /n/, /ž/ と阻害音/v/に限られる。

- a. /pa.sam/ 「はさみ」 (CV.CVC)
 - b. /dai.ban/ 「大きい」 (CVV.CVC)
 - c. /juuž/ 「祝い」 (CVVC;*CVVV)
 - d. /nav/ 「ハエ」 (CVC)

(2-25)V スロットに共鳴音/z/が立つことがある（以下は Rn）。この時、その前に現れるオシセットは単一の C のみであり、しかも /p/, /b/, /k/, /g/, /m/ といった 5 つの子音に限られ、コーダを取らない。/z/ の長短によって対立するが、現時点では /pž/ と /mž/ のデータは見つからなかった。

- a. /p̚.tu/ 「人」 (CRn.CV)
 - b. /b̚.da/ 「低い」 (CRn.CV)
 - c. /ž.b̚/ 「エビ」 (V.CRn)
 - d. /b̚ž/ 「座れ」 (CRnRn)
 - e. /m̚ž/ 「(肉や魚の) 身」 (CRnRn)
 - f. /ja.kž/ 「焼く」 (GV.CRn)
 - g. /pan.kžž/ 「噛みちぎる」 (CVC.CRnRn)
 - h. /pa.gž/ 「足」 (CV.CRn)
 - i. /gžž.pa/ 「簪」 (CRnRn.CV)

2.2.2 モーラ：

音節構造とモーラは以下のように対応している。

(2-26) 音節構造とモーラの対応：

準音節

正音節

$$(\mathbf{R}_i \quad (\mathbf{R}_j)). \quad ((\mathbf{C}_i \quad \mathbf{C}_j) \quad (\mathbf{G}) \quad \mathbf{V}_1 \quad (\mathbf{V}_2) \quad (\mathbf{C}_{oda}))$$

$$\mu \quad \mu \quad \mu \quad - \quad - \quad \mu \quad \mu \quad \mu$$

正音節のオンセットは、単一子音 C (あるいは C+G) のオンセットはモーラを担わず、重子音オンセット (C_iC_i) の場合のみ、最初の子音が 1 モーラを持つ。この構造から、準音節は最大 2 モーラ、正音節は最大 4 モーラを持つことがわかる。以下、例を表 2-5 に挙げられる。

表 2-5.最大モーラの例

		(R _i)	(R _i)	((C _i)	C _i)	(G)	V ₁	(V ₂)	(C _{oda})
準音節が 2 モーラ 「皆」	/mm.na/ 「皆」	m	m	n			a		
		μ	μ				μ		
正音節が 4 モーラ 「お祝い」	/juuž/ 「お祝い」			j			u	u	ž
				μ			μ	μ	μ

2.2.3 最小語制限

新城方言では、1語が少なくとも2モーラ持たなければならないという最小語制限(word minimality constraint)がある。以下、最小語の例を挙げる(表2-6)。

表 2-6 .最大モーラの例

	準音節		語頭音節						非語頭音節					
	(R)	(R)	((C _i)	C _i)	(G)	V ₁	(V ₂)	(C _{oda})	((C _i)	C _i)	(G)	V ₁	(V ₂)	(C _{oda})
/mm/ 「芋」	m	m												
	μ	μ												
/mci/ 「道」	m		c			i								
	μ					μ								
/jaa/ 「家」			j		a	a								
			μ			μ								
/ffa/ 「子供」			f	f	a									
			μ			μ								
/im/ 「海」					i		m							
					μ		μ							
/maju/ 「猫」		m		a					j	u				
				μ						μ				

2.3 /ž/について

2.3.1 宮古語における/ž/

/ž/ (摩擦の弱い、接近音に近い[z]，以下では[ž]と精密表記) は、伝統的に中舌母音(平山 1964)や舌先母音・舌尖母音(崎山 1963)と呼ばれてきたものであり、宮古語の音韻論で長く議論されている問題である(詳しくは、かりまた 1986, 青井 2012, 下地 2018 を参照)。

/ž/は母音として解釈されることも子音として解釈されることもある。

例えば、狩俣(1986, 2005)は、音声を重視し、平良方言における[ž]を母音/γ/として記述する。一方、下地(2018)は、音節構造を重視し、伊良部島方言における[ž]を子音/ž/として

取り扱い, V スロットに立ちうると記述している。

本論文は音節構造を重視し, 下地(2018)を踏まえながら, 新城方言における/z/を共鳴子音として記述する。

2.3.2 新城方言における/z/

新城方言では, /z/は以下のようないくつかの特徴がある。

まず, 子音としてふるまう点は以下の3つである。

一番目は, 準音節ではない音節, すなわち, 正音節(下地2018の用語)のコーダに立ちうることである(2-27)。

(2-27) /paž/ [paž] 「蠅」, /juuž/ [ju:ž] 「お祝い」 (CVVC; *CVVV³)

二番目は, /m/, /n/, /f/といった子音と同様, 正音節のCCオンセットに立ちうることである(2-28)。

(2-28) /žžu/ [žžu] 「魚」 (CCV; cf. /mma/ 「母親」, /nna/ 「貝」, /ffa/ 「子供」など)

三番目は, 音声的に口腔内の積極的な狭めがあることである。上記の(2-27)と(2-28)に示すように, /z/は接近音[ž]として発音されている。

一方, 母音としてふるまう点もみられる。それは, 正音節のV(音節核)に立ちうることである。

(2-29)

- a. /pžtu/ [pstu] 「人」 (CVCV), /kžkari/ [kškari] 「聞こえ(て)」 (CV.CV.CV)
- b. /žbž/[žbž] 「エビ」 (RnCRn)

上記の特徴を踏まえ, 本論文では, /z/を音素として子音(共鳴音)に分類する。/z/はVスロットに立ちうるが, そのオンセットは/p/, /b/, /k/, /g/, /m/といった5つの子音に限られる。無声閉鎖音に挟まれる場合, 上記の(2-29a)のように, /z/が無声化され, [s]として実現する。

2.4 主な形態音韻規則

2.4.1 連濁

複合語の非語頭語幹のオンセットに立つ子音が無声阻害音の場合, その子音が有声阻害音に交替する(2-30)。しかし, これは義務的ではない。

³ 下地(2018)によると, 宮古諸語は3つの母音連続が許されないという規則がある。

(2-30) 連濁規則 (隨意規則)

- a. /p/ : /pana/ 「花」 → /b/ /kagi+bana/ 「きれいな花」 (きれい+花)
- b. /k/ : /kii/ 「木」 → /g/ /bžda+gii/ 「低木」 (低い+木)
- c. /f/ : /ffa/ 「子供」 → /v/ /midun+vva/ 「娘」 (女+子供)

2.4.2 母音始まりの助詞に限る音韻規則

2.1.3.1 で述べたように、母音始まりの助詞が後接した場合、以下の形態音韻的交替が見られる(表 2-7)。

表 2-7. 母音始まりの助詞が後接した場合の形態音韻論的交替 (再掲)

		主題//=a//	対格//=u//	例	
語幹末		=a	=u	主題助詞	対格助詞
a.	-C	-C _i =C _i a	C _i =C _i u	/kanamaz=za/ (頭は)	/kanamaz=zu/ (頭を)
b.	-V ₁ V ₂	-V ₁ V ₂ =ja	-V ₁ V ₂ =ju	/macigii=ja/ (まつげは)	/macigii=ju/ (まつげを)
c.	-X (それ以外)	-X=a	-X=u	/pana=a/ (花は)	/pana=u/ (花を)

表 2-7 に、2 つの音韻規則が観察される。一番目は重子音化規則(a)であり、二番目は j 插入規則(b)である。

以下、重子音化規則(2.4.2.1)、j 插入規則(2.4.2.2)の順で述べる。

2.4.2.1 重子音化規則

まず、語幹末子音が、母音始まりの接語に直接後続される場合 (//C//+//=V//)、重子音化規則が適用され、/C_iC_iV/になる(2-31)。

- (2-31) a. *mccu* *ažkadaan.*
 mc=cu ažk-a-daan.
 道=ACC 歩く-THM-INT.NEG
 「道を歩かない。」
- b. *ammu* *pari.*
 am=mu par-i.
 網=ACC 張る-IMP
 「網を張れ。」

2.4.2.2 /j/挿入規則

表2-7の(b)に示しているように、母音始まりの助詞（主題助詞=a、対格助詞=u）は、接続する語幹末の音節核がVV（長母音、または二重母音）の場合、j挿入規則が適用される(2-32)。

(2-32)	<i>sjuuja</i>	<i>nzankaiga</i>	<i>ikadiga?</i>
	<i>sjuu=a</i>	<i>nza=nkai=ga</i>	<i>ik-a-di=ga?</i>
	お爺さん=TOP	どこ=ALL=Q.FOC	行く-THM-INT=Q
「お爺さんはどこに行きますか。」			

2.4.3/i/挿入規則

2.1.3.1で述べたように、異なる阻害音からなる子音連続や、阻害音と鼻音からなる子音連続、摩擦子音終わりの語を避けるために、/i/挿入規則という音韻規則が適用される(2-33)。

- (2-33)
- a. //cki//→/ciki/ 「聞け」
 - b. //sna//→/sina/ 「品」
 - c. //muzkas//→/muzikasi/ 「難しい」

2.4.4 鼻子音連続削除規則

形態素境界で生じる鼻音からなる子音連続のうち、2番目の鼻音が歯茎鼻音/n/の場合(//m-n//, //n-n//), 当該規則によって、/n/が削除される。(2-34b)は、1番目、2番目いずれの/n/が削除されるかわからないが、(2-34a)をもとに、2番目が削除されていると解釈できる。

- (2-34)
- a. //im=nkai//(海=ALL)→/imkai/ [imkai] 「海に」
 - b. //in=nkai//(犬=ALL)→/inkai/ [inkai] 「犬に」

2.4.5 上り二重母音融合規則

新城方言では、上り二重母音は形態素境界を跨いだ場合にのみ生じ、//ia//が音声的に[ja]になり、//iu//が[ju]になる

(2-35)上り二重母音融合規則：

- a. //ia//→[ja]
- b. //iu//→[ju]

以下、例示する。以下で、//ia//は長音化され、[ja:]となっているが、これは代償延長(2.4.6.3を参照)を適用した結果である。

(2-36) //kari=a// (彼=TOP)→/karjaa/ [karja:] 「彼は」

2.4.6 動詞形態論に固有の音韻規則

2.4.6.1 後舌化規則

義務的ではないが、母音-i 終わりの動詞語幹に歯茎音始まりの接辞が付く場合、語幹末の-i が-u に交替する現象が観察される。その要因についてはまだ分かっておらず、さらなる調査を加え、今後の課題として扱う予定である。

(2-37)後舌化規則（隨意規則）：

歯茎音（現時点で観察されるのは t,d,n）始まりの接辞が動詞に後続する時、母音語幹末の-i が-u に交替する。

以下、idi-「出る」の例が後舌化規則を適用して派生する過程を(2-38)に示す。

(2-38)

- a. //idi-//+//tar//→/idu-taa/ (出る-PST「出た」)
- b. //idi-//+//di//→/idu-di/ (出る-INT「出る」)

2.4.6.2 /r/脱落規則

子音-r 終わりの動詞語幹や、子音-r 終わりの接辞が、語末において、または子音始まりの接辞が後続すると、脱落する。

(2-39)/ r/脱落規則：

$$\begin{array}{c} -r \rightarrow \phi / _ \# \\ \quad \quad \quad _ -C \end{array}$$

以下、動詞語幹//ur-//「いる」、接辞//tar//の例に後舌化規則が適用され、派生される過程を(2-40)に示す。

(2-40)

- a. //ur-//→/ r/脱落規則→/u/→代償延長→/uu/

- b. //tar// → /r/ 脱落規則 → /-ta/ → 代償延長 → /-taa/
- c. //ur-//+//tar// → /r/ 脱落規則 → /u-ta/ → 代償延長 → /uu-taa/

また, /r/ 脱落現象は *ku(r)i*, *u(r)i*, *ka(r)i* といった指示詞にも時にみられる (義務的ではない) ため, (2-39) の /r/ 脱落規則を以下のように直す。

(2-41) /r/ 脱落規則 (修正) :

$$\begin{array}{c}
 -r \rightarrow \phi / \underline{\quad} \# \\
 \underline{\quad} -C \\
 V \underline{\quad} i \text{ (随意)}
 \end{array}$$

2.4.6.3 代償延長規則

新城方言では, 音韻規則による音素の脱落によって, モーラ数が減る場合, 元のモーラ数を守るために, 代償延長規則が適用される(2-42)。

(2-42)

- a. //ur-// → /r/ 脱落規則 → /u/ → 代償延長 → /uu/
- //tar-// → /r/ 脱落規則 → /ta/ → 代償延長 → /taa/
- b. //ur-//+//tar//(PROG-PST) → /r/ 脱落規則 → /u-ta/ → 代償延長 → /uu-taa/
- c. //mii-//+//tar//(見る-PST) → 後舌化規則 → /miu-taa/ → 上り二重母音融合規則 → /mju-taa/ → 代償延長 → /mjuu-taa/

3 記述の諸単位

3.1 形態論の諸単位

新城方言の音韻と文法の記述において、語・接語・接辞という3つの単位を区別する必要がある。本論文では、以下のような基準でこの3者を区別する。

(3-1)語、接語、接辞の形態的な違い：

- a. 語は、単独で文（発話）をなす最小単位である。
- b. 接語は、単独で文をなすことができず、少なくとも2つの品詞と共に起する。
- c. 接辞は、単独で文をなすことができず、一つの品詞としか共起できない。

上記の基準のうち、(3-1a)に関して、以下の(3-2a-c)はいずれも「何を買ったの？」に対する答えの文として使えるが、(3-2a)は単一形態素、(3-2b, c)は複数の形態素から成り立っている。(3-2a)は、これ以上要素を取り去ることができないため、これを語と見ることができる。一方、(3-2b)からモダリティ助詞の=*pazi* を取り去っても文として成立しうるため、(3-2b)は語ではない。単独で文となる最小単位は *hun* であり、これが語である。*=pazi* 単独では文とならず、これは(3-1b)の基準によって接語と判定される（後述）。(3-2c)において、*ss*-だけでは文として成立できず、「何を買ったの？」に対する返答として成立する最小単位は *ss-ai-n* である。よって、上記(3-1a)の基準から、*ss-ai-n* が語である。*ss*-は語根、*-ai*, *-n* は、(3-1c)によって接辞と認定される。

(3-2) a. *hun*.

hun.

本

「(何を買ったの？) に対して」本。」

b. *hunpazi*.

bun=paz.

本=LCTN

「(何を買ったの？) に対して) 本だろう。」

c. *ssain*.

ss-rai-n.

知る-POT-NEG.NPST

「(何を買ったの？) に対して) わからない。」

(3-2b)における=*pazi* や(3-2c)における-*rai*, -*n* など、語根を除く拘束形態素は接辞か接語かのいずれかに分類される。これは(3-1b, c)の基準によって、すなわち当該形式が接続しうる要素の選択制限によって判定する。接語の例として、例えば焦点助詞の=*du* を挙げることができる(3-3)。これは、項、動詞語幹、助詞、副詞など、焦点化される文中の様々な要素に接続するため、結果的に多様な品詞と共に起する。よって、これを接語としてみることができる。

(3-3) a.	<i>imnudu</i> [im=n̥u]=du 海=NOM=FOC 「海が見え（てい）る。」	<i>miirai</i> mii-rai 見る-POT (名詞に接続)	<i>uu.</i> ur- φ. PROG-NPST
b.	<i>hunnu</i> hun=n̥u 本=ACC 「本を読んでいる。」(動詞に接続)	<i>jumiidu</i> [jum-i-i]=du 読む-THM-SEQ=FOC PROG-NPST	<i>uu.</i> ur- φ. PROG-NPST

一方、(3-4)が示すように、可能を表す-*rai* や否定を表す-*n* は動詞語根にしか接続しないため、(3-1c)によって接辞と認定される。

(3-4)

- a. //mii-rai//(見る-POT)→/miirai/「見える」
- b. //mii-n//(見る-NEG.NPST)→/miin/「見ない」
- c. //mii-rai-n//(見る-POT-NEG.NPST)→/miirain/「見えない」

3.2 品詞一覧

新城方言における品詞は、名詞、動詞、形容詞、連体詞、助詞、間投詞、副詞といった7つの品詞類が認められる。なお、疑問詞や指示詞は、例えば疑問代名詞や疑問連体詞のように、複数の品詞を跨いだ分布を見せ、品詞とは別のレベルで体系「機能類」(下地 2018)をなしている。これらの「機能類」については第10章で扱う。

3.2.1 名詞

名詞は、名詞句の主要部にのみ立つ。名詞句(第7章を参照)は統語的に項及び述語として機能するので、名詞は名詞句の主要部として項と述語いずれにも立つことができる。

(3-5) a.	<i>p̥tu</i> [p̥tu] _{主要部} 「人」(修飾部なしの名詞句の主要部に立つ)	
b.	<i>burdurjuu</i> [burdur-i] _{修飾部} 踊る-THM 「踊っている人」[田平 2018:13 (6-a)] (修飾部ありの名詞句の主要部に立つ)	<i>p̥tu</i> ur- φ PROG-NPST 人
c.	<i>p̥tunudu</i> [p̥tu] _{主要部} =n̥u=du 人=NOM=FOC 「人が大勢いる(人が多い)。」(項に立つ)	<i>jamakasa</i> jamakasa 大勢 「いる」-NPST
d.	<i>karjaa</i>	<i>kapuganu</i> <i>p̥tu.</i>

kari=a	[kapuga=nu] ^{修飾部}	[pžtu] ^{主要部}
彼=TOP	大きい=GEN	人
「彼は（体の）大きい人だ。」（述語に立つ）		

3.2.2 動詞

動詞は、形態的には屈折し、統語的には常に述語に立つものとして定義される。動詞の構造について、第5章で詳述する。以下、動詞語幹 *jak-*「焼く」が定動詞と副動詞として屈折する例を挙げる。

- (3-6) a. žžuu *jakžtaa.*
 žžu=u jak-ž-tar.
 魚=ACC 焼く-THM-NPST
 「魚を焼いた。」（定動詞として屈折し、主節の述語に立つ）
- b. žžuu *jakii* *fautaa.*
 žžu=u jak-i-i fa-u-tar.
 魚=ACC 焼く-THM-SEQ 食べる-THM-PST
 「魚を焼いて、食べた。」（副動詞として屈折し、副詞節の述語に立つ）

3.2.3 形容詞

形容詞は、主語・目的語などの動詞の項にならず、語彙的なアスペクトとして状態性を持つ。形態上、状態や性質、属性を表す Property Concept 語根(Thompson 1988, 下地 2018)（以下は PC 語根）の重複形で現れる。

- (3-7) a. pisii~pisi b. bždaa~bžda
 pisii~pisi bždaa~bžda
 寒い~RED 低い~RED
 「寒い」 「低い」

PC 語根に加え、ごくわずかな名詞語根（属性名詞）も重複でき、形容詞となることができる(3-8)。形容詞を含む PC 語について第6章で詳述する。

- (3-8) avvaa~avva
 avvaa~avva
 油~RED
 「油っぽい」

3.2.4 連体詞

連体詞は、そのままの形で、名詞を修飾できるものである。指示連体詞/*kunu*/「この」, /*unu*/「その」, /*kanu*/「あの」がある。以下, /*unu*/「その」の例を挙げる。

- (3-9) *unu fikuu aka+munu.*
unu fku=u aka+munu.
その 服=TOP 赤+DHD
「その服は赤い。」

3.2.5 助詞

助詞は、句ないし節の主要部にならず、句に後続し、様々な文法機能を果たすものである。助詞は、格助詞、取り立て助詞、情報構造助詞、接続助詞、終助詞に分かれる。

- (3-10) a. *baga sinsiija hunnu*
ba=g a sinsii=a hun=nu
1SG=GEN (格助詞) 先生=TOP (情報構造助詞) 本=ACC (格助詞)
jumjuu p̄̄tu.
jum-i ur- φ p̄̄tu
読む-THM PROG-NPST 人
「私の先生は本を読んでいる人だよ。」
- b. *kanbannudu kairjuurjaa.*
kanban=nu=du kair-i
看板=NOM (格助詞) =FOC (情報構造助詞) 倒れる-THM
ur- φ =rjaa
PROG-NPST=SFP (終助詞)
「看板が倒れているよ。」
- c. *sinbunnu ſſimai jumarain.*
sinbun=nu ſſi=mai jum-a-rai-n.
新聞=GEN 字=ADT(取り立て助詞) 読む-THM-POT-NEG
「新聞の字も読めない。」
- d. *jaaju vvadittudu*
jaa=u vv-a-di=tti=du
家=ACC 売る-THM-INT=QT(接続助詞)=FOC
umuijuu.
umu-i ur- φ .
思う-THM PROG-NPST
「家を売ろうと思っている。」

3.2.6 間投詞

間投詞は、句や節の内部要素にならず、常に単独で発話（文）になる。

(3-11)

- a. /oo/ 「はい」
- b. /hai/ 「おい」
- c. /ogoe/ 「うわあ」
- d. /aggai/ 「あつ」

3.2.7 副詞

副詞は、上記のどの品詞にも当てはまらないものである。主に動詞や形容詞を修飾する。以下(3-12)の *icimai* は副詞として認定する。

(3-12)	<i>icimai</i>	žžuu	<i>faan.</i>
	icmai	žžu=u	fa-a-n.
いつも 魚=ACC 食べる-THM-NEG.			
「いつも魚を食べない。」			

3.3 文の基本構造

3.3.1 主語と目的語

現時点では、新城方言における主語、目的語を認定するための基準が確立できていないため、ここでは、角田(2009)の基準を用いて、意味の側面から主語と目的語を暫定的に定める。

角田(2009)は、通言語的な観点から、他動詞の原型を「相手に及び、かつ相手に変化を起こす動作を表す動詞」(角田 2009:77) としている。仮に、ある言語で主語と目的語が設定できるなら、他動詞の原型を使った他動詞文（原型他動詞文）の動作主（A）は主語の典型、被動者（P）は目的語の典型であると想定できる。本論文では、この想定に立ち、原型他動詞文の考察から、主語と目的語を仮に認定する。

典型的な他動詞の例が取れなかったため、以下、目的語が典型的な被動作者である（が、必ず変化を起こすわけではない）例を挙げる。

(3-13)において、*mminzitaa* 「殴った」という動作の動作主は太郎であるため、太郎は主語である。この名詞句は格助詞=ga/=nu によって標示され、その特徴が自動詞文の唯一項 (S) にも適用される。よって、自動詞文の唯一項も主語と認定できる。一方、*mminzitaa* 「殴った」という動作を受けたた花子は目的語である。この名詞句は格助詞=u で標示されている。

- (3-13) *taroogadu hanakou mminzitaa.*
 taroo=ga=du hanako=u mminz-i-tar..
 太郎=NOM=FOC 花子=ACC 殴る-THM-PST.
 「太郎が花子を殴った。」

3.3.2 格組織

新城方言では、すでに述べたように、主語 (A/S) は=ga, =nu によって標示し、目的語 (P) は= u (または第二対格=a) によって標示する。よって、この方言は主格対格型の格組織を持つと言える。

宮古諸語は、有標主対格言語(marked nominative-accusative)であり、主格にも対格にも義務的に格標示されるといわれる(下地 2018)。高橋(2018)によると、新城方言でも格省略はほとんど起こらず、以下の勧誘文のみ、対格の格省略が許容されるという。

- (3-14) *cjaa(ju) nunga ci.*
 cjaa(=u) nun-ga ci.
 お茶(=ACC) 飲む-PURP さあ、ほら
 「お茶 (を) 飲みに行こう。」
 (直訳「お茶飲みにさあ、ほら。」) [高橋 2018:16(30a)]

3.3.3 主節平叙文の語順

主節の平叙文は、自動詞文なら SV である(3-15a)。他動詞文の場合 APV の順が多い(3-15b)。二重他動詞文の場合、現時点のデータからは主語、直接目的語、間接目的語、述語という順が確認できる(3-15c)が、主語、間接目的語、直接目的語、動詞の順が可能かどうか確認できず、今後の課題とする。

名詞句における修飾部・主要部名詞・格助詞の順序は修飾部、主要部名詞、格助詞という順である(3-15d)。

- (3-15) a. *pavnudu* *sintaa.*
 pav=nu=du sn-tar.
 蛇=NOM=FOC 死ぬ-PST
 「蛇が死んだ。」 (自動詞文)
- b. *taroogadu* *hanakou* *mminzitaa.*
 taroo=ga=du hanako=u mminz-i-tar.
 太郎=NOM=FOC 花子=ACC 殴る-THM-PST.
 「太郎が花子を殴った。」 (普通の他動詞文)
- c. *karigadu* *koosjuu* *banun* *fiitaa.*
 kari=ga=du koosi=u banu=n fii-tar.
 彼=NOM=FOC お菓子=ACC 1SG=DAT くれる-PST
 「彼がお菓子を私にくれた。」 (二重他動詞文)
- d. *kžnu* *miitaa* *sjukudaiju* *mjuudi.*
 kžnu mii-tar sjukudai=u mii-di.
 昨日 見る-PST 宿題=ACC 見る-INT
 「昨日見た宿題を見る。」 (修飾部, 主要部名詞, 格助詞という順)

4 名詞類

4.1 人称代名詞

新城方言の人称代名詞体系は以下の表 4-1 の通りである。

表 4-1. 新城方言の人称代名詞体系

	単数	複数
1 人称	ba=; banu; ban	ban-taa
2 人称	vva	vva-taa

次節で後述するように、1 人称単数形は 3 つの格形がある。なお、新城方言には 3 人称代名詞が存在せず、3 人称指示には指示代名詞が使われる（10.2 を参照）。

以下、4.1.1 に一人称、4.1.2 に二人称を扱う。

4.1.1 一人称

1 人称単数形は、主格・属格・主題形の ba、対格・与格形の banu と斜格・名詞述語形の ban という 3 つの形が存在する。表 4-2 のように示す。

表 4-2. 新城方言の 1 人称単数代名詞の形

ba=	主格・属格・主題形
banu	対格・与格
ban	斜格・名詞述語形

- (4-1) a. *soozzuba* *bagadu* *siitaa.*
sooz=zu=ba ba=ga=du si-i-taa.
掃除=ACC=TOP 1SG=NOM=FOC する-THM-PST
「掃除は私がした。」
- b. *innudu* *banuu* *mijuu*
in=nu=du banu=u mii ur- ϕ .
犬=NOM=FOC 1SG=ACC 見る PROG-NPST
「私が犬を見ている。」
- c. *banun* *firu.*
banu=n fii-ru.
1SG=DAT くれる-IMP
「私に下さい。」
- d. *urjaa* *ban.*

uri=a	ban.
それ=TOP	1SG
「それは私だよ。」	

新城方言には1人称双数がない。話し手と聞き手を指す時, *ban=tu futaa* (1SG=ASC 二つ・二人) という。
複数形は *ban-taa* であり, 除外・包括の区別がない。

- (4-2) a. *kunu* *sigamauba* *bantaaga* *sjuucciba*, *vvaa*
 kunu *sgama=u=ba* *ban-taa=ga* *si-u-cciba*, *vva=a*
 この 仕事=ACC=TOP 1-PL=NOM する-THM-CSL 2SG=TOP
maci.
mac-i.
 待つ-IMP
 「この仕事は私たちがするから, お前は待て。」(除外)
- b. *kunu* *sigamaau* *bantaaga* *macikii* *suudi.*
 kunu *sgama=u* *ban-taa=ga* *macikii* *suu-di.*
 この 仕事=ACC 1-PL=NOM 一緒に する-INT
 「この仕事は私たちが一緒にしよう。」(包括)

4.1.2 二人称

2人称単数形は *vva* であり, 複数形は *vva-taa* である。

- (4-3) a. *soozzuba* *vvaga* *siigamatana*
 sooz=zu=ba *vaa=ga* *si-i=gamata=na*
 掃除=ACC=TOP 2SG=NOM する-SEQ-べき=SFP
 「掃除はお前がするべきだね。」(主格)
- b. *innudu* *vvau* *mijuu*
 in=nu=du *vva=u* *mii+* *ur-φ.*
 犬=NOM=FOC 1SG=ACC 見る PROG-NPST
 「犬があなたを見ている。」(対格)
- c. *vvan* *fiitaa.*
 vva=n *fi-tar.*
 2SG=DAT あげる-PST
 「あなたにくれた。」(与格)
- d. *urjaa* *vva.*
 uri=a *vva.*
 それ=TOP 2SG
 「(写真に写った人を指してそれはあなただよ。」

4.2 再帰代名詞

再帰代名詞は単数形が *duu* であり、複数形が *duu-taa* である。宮古諸語には *na(r)a* という形もみられる（下地 2018 など）が、新城方言はまだ確認できていない。

再帰代名詞としての典型的な用法として、同一節内の主語を照応先として取る代名詞としての用法がある。

- (4-4) a. *duuga ffaa mmna kagimunu.*
duu=ga ffa=a mmna kagi+munu.
RFL=GEN 子供=TOP みんな かわいい+DHD
「自分の子供はみんなかわいい。」
- b. *hanakoo duusii sjukudai=ju sjuufti njaan.*
hanako=a duu=sii sjukudai=u si-u-f njaan-n.
花子=TOP RFL=INST 宿題=ACC する-THM-VLZ RSL-NPST
「花子は自分で宿題をしなくなった。」

4.3 名詞

名詞は単独で語になりうるが、複数接辞-taa や指小辞-gama といった派生接辞を伴うこともある。以下は *sinsii* 「先生」の例である。

- (4-5) a. *sinsiiga uutaa.*
sinsii=ga ur-tar.
先生=NOM いる-PST.
「先生がいた。」(項として)
- b. *karjaa sinsiidu jaataa.*
kari=a **sinsii=du** jar-tar.
彼=TOP 先生=FOC COP-PST
「彼は先生だった。」(述語として)
- c. *sinsitaaga kžtar.*
sinsii-taa=ga kž-tar.
先生-PL=NOM 来る-PST
「先生たちが来た。」(派生接辞を伴う)

4.4 数詞

数詞は、名詞句の従属部に立ち、名詞の数量を限定する修飾要素に立つことができ、名詞句の主要部に立って、代名詞的に働くこともできる。

- (4-6) a. *icinu* *pžtu*
 ic=nu pžtu
 5-CLF[人]=GEN 人
 「5人の人」(修飾要素として)
- b. *bantaa* *futaažtu* *akiraga* *ik-a-di.*
 ban-taa futaaž=tu akiraga ik-a-di.
 1SG-PL 2-CLF[人]=ASC あきら=NOM 行く-THM-INT
 「私たち二人とあきらが行く。」(名詞句の主要部として)

数詞の体系について、現時点分かったものを以下の表 4-3 にまとめる (?)は未調査)。

表 4-3. 新城方言の数詞の体系

数えられる対象	もの一般	日	人	動物	軒	木	枝	タバコ	車	酒
1 pžtu-	piciči	?	taukjaa	pžtu-kara	pžtu-kjuu	pžtu-gii	pžtu-juda	pžtu-kuu	ici-dai	ici-goo
2 futaa-	futaaci	?	futaaž	futaa-kara	futaa-kjuu	futaa-gii	futaa-juda	futaa-kuu	?	?
3 miž-	mičči	mižka	micaa/ micjaa ž	miž-kara	miž-kjuu	miž-gii	miž-juda	miž-kuu	?	?
4 ju(u)-	juuci	juuka	jutaaž	juu-kara	juu-kjuu	juu-gii	juu-juda	juu-kuu	?	?
5 ici-	icicí	?	ici=nu	ici-kara	ici-kjuu	ici-gii	ici-juda	ici-kuu	?	?
6 mm-	mmci	?	?	?	?	?	?	?	?	?
7	nanaci	?	?	?	?	?	?	?	?	?
8 jaaci	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
9 kukunu ci	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
10 tu(u)	?	tuka	?	tuu-kara	?	?	?	?	?	?
100 pjaaku	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
多く	mmna	?	mmna				jamakasa			

動物を数える形式に関しては、話者の話と与那覇 (2003:325)によると、動物の体積と関係なく、小動物（日本語なら「匹」），鳥類（日本語なら「羽」），馬や牛（日本語なら「頭」）などは全部「○-kara」で表す。

4.5 名詞形態論

4.5.1 指小辞-gama

宮古諸語に見られる指小辞-gama は「典型的に小さいものや、愛着のある対象に対して用いるが、通言語的によく見られるように、対象を卑小化し、相手を馬鹿にする語用論的な効果もある。」（下地 2018:144）

調査した結果、新城方言にも当てはまる。以下(4-7a)は愛着を表し、(4-7b)は卑小化を表す。

- (4-7) a. *unu ffaa miinudu kagimunugama.*
unu ffa=a mii=nu=du kagi+munu-gama.
この 子供=TOP 目=NOM=FOC きれい+DHD-DIM
「この子は目がかわいい（きれいだ）」（愛着）
- b. *vvagama*
vva-gama
2SG-DIM
「お前め」（卑小化）

語彙的に-gama が付くことが決まっているものもある。

- (4-8) a. *uibigama*
uibi-gama
小指-DIM
「小指」
- b. *piccagama*
picca-gama
少ない-DIM
「少ない」

4.5.2 複数接辞-taa;-nukjaa

複数接辞として、-taa と-nukjaa がある。意味上違いがないが、接続する名詞句によって選択するが、-taa も-nukjaa も使える名詞句の例もみられる。

新城方言では、代名詞、疑問代名詞、呼称可能な名詞は-taa を用い、一方、人間名詞は-nukjaa を用い、指示代名詞は両方使える。

(4-9)

- a. ban-taa (1SG-PL) 「私たち」
- b. vva-taa (2SG-PL) 「あなたたち」
- c. duu-taa (RFL-PL) 「自分たち」
- d. tau-taa (誰-PL) 「誰たち」
- e. uja-taa (父-PL) 「お父さんたち」
- f. sinsii-taa (先生-PL) 「先生たち」
- g. kai-taa, kai-nukjaa (彼-PL) 「彼ら」
- h. ffa-nukjaa (子供-PL) 「子供たち」

新城で得たデータを以下の図にまとめる。図 4-1 では、1 は 1 人称を、2 は 2 人称を、PL は複数を、ADDRESS は呼称詞を、DEM は指示代名詞を、WHO は疑問代名詞「誰」を表す。-taa の使用範囲は四角形の枠によって表し、-nukjaa の使用範囲は丸枠によって表す。

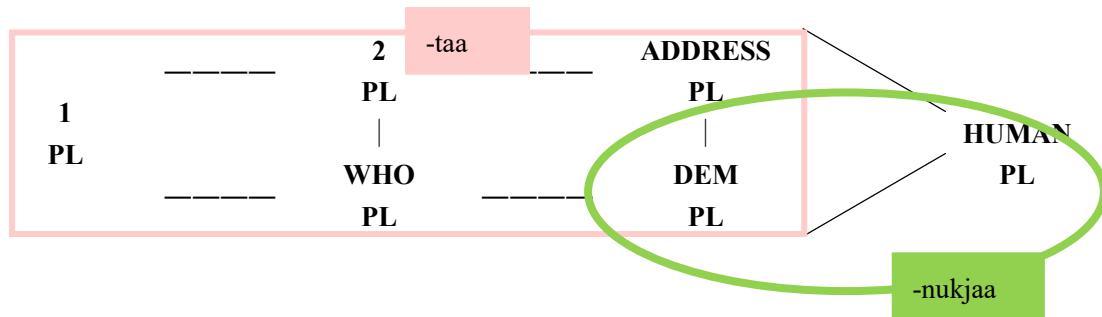


図 4-1. 新城方言における複数標示（下地 2017 をベースに、筆者が作成）

5 動詞の構造

宮古諸語の先行文献(伊良部島長浜：下地 2018；池間西原：林 2013 など)を参考に、新城方言における動詞の構造を以下のようにまとめる。

(5-1) 語幹 (-語幹拡張辞) -屈折接辞

- a. 語幹は、少なくとも 1 つの語根からなるが、語根に派生接辞が後続する形、2 つの語根からの複合語幹や、PC 語根と動詞化接辞からなる語幹にも存在する。(5-2)に例示する(語幹を[]によって示す)。
- b. 語幹拡張辞 (thematic vowel; Shimoji 2008) は、特定の屈折接辞を取る際に現れる接辞である。

(5-2) a. *miiru*

[mii]-ru

見る-IMP

「見ろ」(1 つの動詞語根からなる動詞語幹)

b. *miirain*

[mii-rai]-n

見る-POT -NEG.NPST

「見えない」(動詞語根と派生接辞からなる動詞語幹)

c. *ažki+maarii*

uu.

[[ažk]-i+[maar]]-i-i

ur- ϕ

歩く-THM+回る-THM-SEQ

PROG-NPST

「歩いている」(2 つの動詞語幹からなる複合動詞語幹)

d. *takafī*

narjuu

[taka-f]

nar-i-i

ur- ϕ

高い-VLZ

なる-THM-SEQ

PROG-NPST

「高くなる」(PC 語根と動詞化接辞からなる動詞語幹)

語幹拡張接辞は、それ自体はなんらかの機能を持っているとは考えておらず、特定の屈折接辞を取る際に現れる接辞であり、語幹のクラス(5.1 に後述する)によって、新城方言では-i-, -a-, -ž-, -u-が出現する。以下、新城方言の例を挙げる。(5-3a~d)はそれぞれ *kak-* 「書く」という語幹が-i-, -a-, -ž-, -u-拡張辞を取る例であり、(5-3e)は *fa-* 「食べる」という語幹が-u-拡張辞を取る例である。

(5-3) a. *kaki*

kak-i

書く-IMP

「書こう」(語幹拡張接辞なし)

b. *kakiba*

kak-i-ba

書く-THM-CSL

「書くので」(-i-語幹拡張辞を取る)

- c. *kakan*
kak-a-n
書く-THM-NEG.NPST
「書かない」(-a-語幹拡張辞を取る)
- d. *kakžtaa*
kak-ž-tar
書く-THM-PST
「書いた」(-ž-語幹拡張辞を取る)
- e. *fautaa*
fa-u-tar
食べる-THM-PST
「食べた」(-u-語幹拡張辞を取る)

5.1 動詞語幹の分類

宮古諸語を概観すると、どの方言でも2つの活用クラスが認められる(詳しくは Shimoji 2008, Pellard 2009, 衣畠・林 2013, 林 2013, 下地 2018, セリック 2018などを参照)。Shimoji(2008)は、伊良部島方言についてこのクラスを音韻的に定義するが、これは新城方言にも当てはまる。

まず、不規則な語幹交替の有無によって、大きく規則動詞語幹と不規則動詞語幹に分けられる。不規則語幹をクラス3に分類し、規則語幹はさらに、語幹拡張辞の出没によってクラス1とクラス2に分ける。新城方言の動詞語幹の分類は以下表5-1のように示す。

表 5-1. 動詞語幹の分類

規則語幹	クラス1	すべて母音-iで終わる語幹からなる。 mii-「見る」, ibi-「植える」, žži-「入れる」など
		規則語幹のうち、クラス1以外のすべて。
	クラス2	jum-「読む」, ss-「知る」, kak-「書く」, fa-「食べる」など
不規則語幹	クラス3	不規則な語幹の形態音韻交替が生じる「する」と「来る」といった2例からなる。

以下では、個々のクラスについて述べる。

5.1.1 クラス1

クラス1の動詞語幹は以下の特徴を持っている(5-4)。

(5-4) クラス1の動詞語幹の特徴 :

- a. 語幹末の音素はすべて母音-iである。
- b. 屈折する時、語幹拡張接辞を要らず、語幹に直接屈折接辞を付く。

- c. 不規則な語幹交替がないが、特定の屈折接辞を取る際、規則な音韻規則によって語幹交替が観察される。

以下、それぞれ例を挙げながら、説明する。

まず、語幹末に立つ音素 *i*-とその直前に現れる音素の組み合わせについて、以下の3つのパターンが観察される。

(5-5)

- a. /Ci/ 例 : *idi-* 「出る」
- b. /ii/ 例 : *mii-* 「見る」
- c. /Vi/ 例 : *mii-ra(r)i-* (見る-POT) 「見える」

次に、屈折する時、語幹拡張接辞を要らず、語幹に直接屈折接辞を付く。否定接辞-nによって屈折する例を示す（/は交替を表す）。

(5-6)	a.	<i>idin</i>	/	<i>idun</i>
		<i>idi-n</i>		<i>idu-n</i>
		出る-NEG.NPST		出る-NEG.NPST
		「出ない」		
	b.	<i>miin</i>	/	<i>mjuun</i>
		<i>mii-n</i>		<i>miu-n</i>
		見る-NEG.NPST		見る-NEG.NPST
		「見ない」		
	c.	<i>miirain</i>		
		<i>mii-rai-n</i>		
		見る-POT-NEG.NPST		
		「見えない」		

また、クラス1の語幹は、特定の屈折接辞を取る際、いくつかの音韻規則によって語幹交替が生じる。

以下、*idi-* 「出る」と *mii-* 「見る」が過去接辞-tarと肯定意志接辞-diによって屈折する例を示す（/は交替を表す）。

(5-7)	a.	<i>iditaa</i>	/	<i>idutaa</i>
		<i>idi-taa</i>		<i>idu-taa</i>
		出る-PST		出る-PST
		「出た」		
	b.	<i>ididi</i>		<i>idudi</i>
		<i>idi-di</i>		<i>idu-di</i>
		出る-INT		出る-INT
		「出る」		
	c.	<i>miitaa</i>		<i>mjuutaa</i>
		<i>mii-tar</i>		

見る-PST	見る-PST
「見た」	
d. <i>miidi</i>	/ <i>mjuudi</i>
mii-di	mii-di
見る-INT	見る-INT
「見る」	

1番目は後舌化規則（2.4.6.1を参照）である。この規則の適用は義務的ではない。

(5-8)後舌化規則（隨意規則；再掲）：

歯茎音（現時点で観察されるのはt,d,n）始まりの接辞が動詞に後続する時、母音語幹末の-iが-uに交替する。

(5-7a,b)に示す *idi-*「出る」の例が後舌化規則を適用して派生する過程を(5-9)に示す。

(5-9)

- a. //*idi-*//+//*-tar*//→/*idu-taa*/（出る-PST「出た」）
- b. //*idi-*//+//*-di*//→/*idu-di*/（出る-INT「出る」）

しかし、*mii-*「見る」の派生はさらなる音韻規則が必要である。それは、上り二重母音融合規則（2.4.5を参照）と代償延長（2.4.6.3を参照）である。

新城方言では、//*ia*//, //*iu*//といった上り二重母音は形態素境界を跨いだ場合にのみ生じ、//*ia*//が音声的に[ja]になり、//*iu*//が[ju]になる（/kari=a/[karja:] 彼=TOP「彼は」）。

(5-10)上り二重母音融合規則（再掲）：

- a. //*ia*//→[ja]
- b. //*iu*//→[ju]

以下、(5-7c,d)に示す *mii-*「見る」の例の派生過程を示す(5-11)。

mii-「見る」に過去接辞//*-tar*//や意志を表す屈折接辞//*-di*//を接続する時、まず(5-7)の後舌化規則が適用されることによって、語幹にある長母音の片方が-iから-uになり、同じ音節内に*/*iu*/といった許容されない音連続が生じる事になる。そこで、*/*iu*/避けるため、二重母音融合規則(5-10)が適用され、音声上[ju]になると解釈できる。最後に、全体のモーラ数を保持するため、代償延長規則が適用され、/mjuu-di/という形で出力される。（//*-tar*//→//*-taa*/の派生過程は2.4.6を参照）

(5-11)

- a. //*mii-*//+//*-tar*//→後舌化規則→/*miu-taa*/→上り二重母音融合規則→/*mju-taa*/→代償延長→/*mjuu-taa*/（見る-PST）
- b. //*mii-*//+//*-di*//→後舌化規則→/*miu-di*/→上り二重母音融合規則→/*mju-di*/→代償延長→/*mjuu-di*/（見る-INT）

(5-11)に示す *mii-*「見る」の語幹にある長母音の片方が-iから-uに交替する現象は、長母音が短母音の連続である証拠といえる。もし[mi:]の母音を単独の一音素/i:/と見ると、後

舌化規則を適用する前に、もう一つの母音交替規則（長母音音素/i:/→短母音音素/i/）が必要になるが、母音連続とみれば、余分な規則なしで記述できるため、長母音は短母音音素の連続と見なすべきである。

5.1.2 クラス 2

クラス 1 と不規則な動詞語幹以外の動詞語幹は、すべてクラス 2 に分類する。

クラス 2 の語幹動詞の特徴は、特定の屈折接辞を取る際に-i-, -a-, -ž-, -u- という語幹拡張接辞が必要である点である。

語幹拡張接辞の分類について、現時点でわかったところを以下の表 5-2 にまとめる。そのうち、-u-を取る接辞は母音終わりの動詞語幹 fa-「食べる」のみ観察され、-i-, -a-, -ž- といった 3 つの語幹拡張接辞はクラス 2 全般に見られる。

表 5-2. 語幹拡張接辞と屈折接辞

-i-を取る接辞	-a-を取る接辞	-ž-を取る接辞	拡張辞を取らない	-u-を取る接辞 (母音終わりの動詞語幹)
副動詞	非過去・否定・終止 : // -n //	過去・肯定・終止 : // -tar //	命令 : // -i //	非過去・肯定・終止 : // -ϕ //
	意志・肯定・終止 : // -di //	禁止 : // -na //		非過去・否定・終止 : // -tar //
	意志・否定・終止 : // -daan //			禁止 : // -na //
	過去・否定・終止 : // -t -ta -n //			

クラス 2 の多くは子音語幹であるが、fa-「食べる」のような母音語幹も存在する。クラス 2 の動詞語幹は、語幹末の音素によって、違うふるまいをすることが、下地(2018)をはじめ、他の宮古諸語の先行研究で指摘されているが、新城方言では現時点で確認できず、クラス 2 の下位分類は今後の課題とする。

以下、特殊なふるまいをする fa-「食べる」について述べる。

fa-「食べる」は、母音語幹であるが、(1)語幹末が-i でない点と、(2)特定の屈折接辞を取る際に語幹拡張接辞が必要とする点で、クラス 1 の動詞語幹と区別し、クラス 2 に分類するが、特別な-u-拡張接辞を取る点で、他のクラス 2 の動詞語幹と異なる(表 5-3)。

表 5-3.kak-「書く」と fa-「食べる」の屈折例

	kak-「書く」	fa-「食べる」	
非過去・肯定	kak-ž-φ (書く-THM-NPST)	fa-u-φ (食べる-THM-NPST)	相違点： 異なる拡張辞 を取る
過去・肯定	kak-ž-taa (書く-THM-PST)	fa-u-taa (食べる-THM-PST)	
非過去・否定	kak-a-n (書く-THM-NEG.NPST)	fa-a-n (食べる-THM-NEG.NPST)	類似点： -a- 拡張辞を 取る

fa-「食べる」の語幹について、下地(2018)によると、fau-はかつて*fav であったと推定される。その音韻変化に関して、(1)現代では音韻変化で*/v/ > /u/ となったか、(2)*/v/を経ずに非拡張語幹の形式が例外的に/fau/になっているという2つの可能性があるという。「いずれにせよ、共時的に語幹を子音語幹の fav-に設定する妥当性がない。現時点では、母音語幹 fa-「食べる」とみる。その形態分析の妥当性はさらなるデータを確認してから行う。

5.1.3 クラス3

クラス3の語幹動詞は、屈折接辞によって、不規則な語幹交替が起こるため、クラス3に分類する。

クラス3は日本語に対応する「する」と「来る」のみである。

5.1.3.1 「する」

日本語の「する」に対応する動詞は、現時点、su-、sii-と as-i-といった3つの語幹形が観察される(5-12)。現時点において、手元のデータによると、「する」が屈折する際に、語幹拡張接辞を取らない場合と、-i-拡張辞を取る場合がある。

- (5-12) a. *kunu* *sigamauba* *vvaga* *suuna.*
 kunu sgama=u=ba vva=g suu-φ=na.
 この 仕事=ACC=TOP 2SG=NOM する-NPST=SFP
 「この仕事はお前がするんだね。」
 (語幹が su-で、語幹拡張辞を取らない)
 b. *obaagadu* *soozzu* *siitaa.*
 obaa=ga=du sooz=zu si-i-tar.
 お祖母さん=NOM=FOC 掃除=ACC する-THM-PST
 「お祖母さんが掃除をした。」
 (語幹が si-で、語幹拡張辞-i を取る)
 c. *kunu* *sigamauba* *bantaaga* *suu-di.*

	kunu	sgama=u=ba	ban-taa=ga	suu-di.
	この	仕事=ACC=TOP	1SG-PL=NOM	する-INT
「この仕事は私たちがしましょう。」				
(語幹が su- で、語幹拡張辞を取らない)				
d.	<i>kurjaa</i>	<i>asikata</i>	<i>njaan.</i>	
	kuri=a	as+kata	njaa-n.	
	これ=TOP	仕方	ない-NPST	
	「これは仕方ない。」(語幹が <i>asi-</i>)			

同じ宮古諸語では、*asi-*が(5-12a)のような自立した時に用いられると指摘されている(下地 2018)が、手元のデータからは、*asi-*が複合名詞語幹の位置にのみ現れるようである。しかし、データが少ないため、さらなる調査を行い、検証する必要がある

5.1.3.2 「来る」

日本語の「来る」に対応する動詞は、現時点、*kž-*と *kuu-*といった2つの語幹形が観察される。屈折する際、語幹拡張辞を取らない。

(5-13)	a.	<i>sinsiigadu</i>	<i>kžtaa.</i>
		<i>sinsi=ga=du</i>	<i>kž-taa.</i>
		先生=NOM=FOC	来る-PST
		「先生が来た。」(語幹が <i>kž-</i>)	
b.		<i>kumankai</i>	<i>kuu.</i>
		<i>kuma=nkai</i>	<i>kuu.</i>
		ここ=ALL	来る.IMP
		「ここに来て。」(語幹が <i>kuu-</i>)	

5.2 屈折形態論

本節は動詞の屈折形態論を扱う。定動詞は肯否・テンスによって屈折し、副動詞はテンスで屈折せず、肯否のみで屈折する。以下、下地(2018)を参考に、定動詞と副動詞の屈折についてまとめる(表 5-4)。

表 5-4. 新城方言の定動詞と副動詞の屈折

		定動詞		副動詞
		希求法	直説法	
統語環境	文末終止	○	○	×
	連体節	×	○	×
	副詞節	×	×	○
屈折カテゴリー	肯定	△	○	△
	テヌス	×	○	×
	ムード	○	×	×

以下、5.2.1 は定動詞の屈折形態論を、5.2.2 は副動詞の屈折形態論を扱う。

5.2.1 定動詞

定動詞は肯否・テヌスによって屈折する (5-14)。

- (5-14) *mccu ažkattan.*
mc=cu ažk-a-t-ta-n
道=ACC 歩く-THM-0-PST-NEG
「道を歩かなかった。」

(5-14)に見られる-t-ta-n の分析について、(1) -t-ta-n (-NEG-PST- RLS)、(2) -t-ta-n (-0-PST-NEG)といった 2 通りの分析案がある。

(1)については、-t を否定接辞として分析し、語末の-n は確信を表す-n 語尾とみる。否定接辞-t は、否定接辞//n//が規則的な音韻変化によって、後続した歯茎音(-t)に同化されたと解釈できる。語末の-n について、宮古諸語の中には確信形(下地 2018; 伝統的な琉球語学で「m 語尾」)が見られるものもある。下地(2018:292)によると、確信形は文末終止のみ立ち、焦点助詞と共に起しないという特徴があるという。この特徴は、他の方言の確信形にも当てはまる(林 2013: 池間方言、金田 2015: 多良間島方言)。

新城方言では、(5-15)に示すように、*mii-t-ta-n* が連体修飾節に立つ例があることから、語末の-n が確信形ではない可能性がある。結果的に、否定接辞-n である可能性が高く、(2)の分析案と取るべきである。すなわち、-t は否定を表す機能を失い、形だけ残っている(クロスとして 0 を振る)が、非過去の場合は否定が語末に生じるため、それに合わせて否定接辞-n が語末に出るようになったと解釈できる。

しかし、言語内的な証拠から(1)を排除したわけではないため、その妥当性は今後の課題として扱う。

- (5-15) *kžnu miittan sjukudai*
kžnu mii-t-ta-n sjukudai
昨日 見る-NEG-PST-NEG 宿題
「昨日見なかつた宿題」

以下、現時点では分かっている限り、定動詞の屈折を表 5-5 (クラス 1)、表 5-6 (クラス

2), 表 5-7 (クラス 3) にまとめる (表層形で表す)。

以下, A /B は, A と B が自由交替であることを示し, { }はまだ確認できていない予測形を, ?は未調査を表す。

そのうち, 連体節は直説法でのみ屈折し, 文末終止は直説法でも希求法でも屈折する。

表 5-5. 定動詞の屈折 (クラス 1)

		クラス 1 :	
動詞の例		idi- 「出る」	mii- 「見る」
直説法	非過去・肯定	idi- ϕ	mii- ϕ (見る-NPST)
	非過去・否定	idi-n/ido-n (出る-NEG.NPST)	mii-n/mjuu-n (見る-NEG.NPST)
	過去・肯定	idi-taa/ido-taa (出る-PST)	mii-taa/mjuu-taa (見る-PST)
	過去・否定	idi-t-ta-n/{ido-t-ta-n} (出る-0-PST- NEG)	mii-t-ta-n/mjuu-t-ta-n (見る-0-PST- NEG)
希求法	意志・肯定	idi-di/ido-di (出る-INT)	mii-di/mjuu-di (見る-INT)
	意志・否定	idi-daan/ido-daan (出る-INT.NEG)	mii-daan/mjuu-daan (見る-INT.NEG)
	命令	idi-ru (出る-IMP)	mii-ru (見る-IMP)
	禁止	idi-na/{ido-na} (出る-PROH)	mii-na/{mjuu-na} (見る-PROH)

表 5-6. 定動詞の屈折 (クラス 2)

		クラス 2 :	
動詞の例		kak- 「書く」	fa- 「食べる」
直説法	非過去・肯定	kak-ž- ϕ (書く-THM-NPST)	fa-u- ϕ (食べる-THM-NPST)
	非過去・否定	kak-a-n (書く-THM-NEG.NPST)	fa-a-n (食べる-THM-NEG.NPST)
	過去・肯定	kak-ž-taa (書く-THM-PST)	fa-u-taa (食べる-THM-PST)
	過去・否定	kak-a-t-ta-n (書く-0-PST- NEG)	?
希求法	意志肯定	kak-a-di (書く-THM-INT)	fa-a-di (食べる-THM-INT)
	意志否定	kak-a-daan (書く-THM-INT.NEG)	fa-a-daan (食べる-THM-INT.NEG)
	命令	kak-i (書く-IMP)	fa-i (食べる-IMP)
	禁止	kak-ž-na (書く-THM-PROH)	fa-u-na (食べる-THM-PROH)

表 5-7. 定動詞の屈折 (クラス 3)

クラス 3 :			
動詞の例	「する」	「来る」	
	si-/suu		
直説法	非過去終止	suu- ϕ (する-NPST)	kž- ϕ (来る-NPST)
	過去終止	si-i-taa(する-THM-PST)	kž-taa(来る-PST)
	非過去否定	?	kuu-n(来る-NEG.NPST)
	過去否定	?	?
希求法	意志肯定	suu-di(する-INT)	kuu-di(来る-INT)
	意志否定	?	?
	命令	si-i-ru(する-THM-IMP)	kuu(来る.IMP)
	禁止	si-i-na(する-THM-PROH)	?

5.2.2 副動詞

テンスを標示しない副動詞について、現時点で分かっているものを以下の表5-8（中止形）と表5-9（中止形以外）のようにまとめた（表層形で表す）。

以下、A /Bは、AとBが自由交替であることを示し、?は未調査を表す。

表 5-8. 副詞節動詞の中止形

	クラス 1	クラス 2	クラス 3
動詞の例	idi- 「出る」	kak- 「書く」	「する」
肯定中止形	idi-i	kak-i-i	sii-i
否定中止形	idi-dana(si)	kak-a-dana(si)	suu-dana(si)

表 5-9. 副詞節動詞の中止形以外の形⁴（クラス 1 とクラス 2）

	クラス 1 : 母音語幹		クラス 2 : 子音語幹
動詞の例	idi- 「出る」	mii- 「見る」	kak- 「書く」
否定条件副動詞① 「～しなければ」	idi-dakaa/ idu-dakaa	?	kak-a-dakaa

⁴ クラス 3 は未調査であるため、表にまとめていない。

否定条件副動詞② 「しないと」	?	mii-utakka/ mju-utakka	?
回避副動詞 「しないように」	idi-njoon/ idu-njoon	mii-njoon/ mjuu-njoon	kak-a-njoon
付帯副動詞 「～しておいて」	idi-uki	?	kak-i-uki
条件副動詞 「～したら」	idi-kka	mii-kka	kak-i-kžgaa
理由副動詞① 「～するので」	idi-ccja	?	kak-a-cciba
理由副動詞② 「～するので」	?	mii-ruba	kak-i-ba
同時副動詞 「～しながら」	idi-gaccjaan	mii-gacjaan	kak-ž-gaccjaan
譲歩副動詞 「～しても」	?	mii-romai/ {mjuu-romai}	?
逆接副動詞 「のに」	?	mii-munu	?
即時副動詞 「～するとすぐ」	idi-kka	mii-kka	?

副詞節動詞の中止形以外の形のうち、理由①（意志を込めてる理由、例えば「今家を出るので、もうちょっと待ってて」）について、クラス1の語幹動詞に -ccja が付くのに対し、クラス2は -cciba という接辞が付いている。両者は違う形態素なのか、それとも同じ形態素の異形態なのか、さらなる調査が必要であるため、今後の課題とする。

5.3 存在動詞とコピュラ動詞

存在（肯定）動詞//ur-//「いる」, //ar-//「ある」, および存在否定動詞//nja-//「ない」は, コピュラ動詞の語彙的資源となっている。存在（肯定）動詞とコピュラ動詞は共通点と相違点を有するため, 合わせて記述する。

以下に, 存在動詞とコピュラ動詞の比較を表 5-10 にまとめる。

表 5-10. 存在動詞・コピュラ動詞の比較

	存在動詞	コピュラ動詞
主語の有生性に反応する否か	○	×
否定形に存在動詞を用いるか否か	○	×
動詞述語句に生じるか否か	○	×
/j/始まりの異形態があるか否か	×	○

以下, 存在動詞とコピュラ動詞の屈折を以下の表 5-11 に示す（表層形で表す）。

表 5-12. 存在動詞とコピュラ動詞の屈折

語幹	存在動詞（人）	存在動詞（もの）	コピュラ動詞
	ur-「いる」	ar-「ある」	ar-
非過去	uu- ϕ (//ur- ϕ // → /uu/)	ar- ϕ (//ar- ϕ // → /aa/)	ϕ
過去	uu-taa (//ur-tar// → /uutaa/)	aa-taa (//ar-tar// → /aataa/)	aa-taa/jaa-taa (//(j)ar-tar// → /(j)aataa/)
否定	nja-a-n	nja-a-n	ar-a-n

存在動詞の屈折にもコピュラ動詞の屈折にも r 脱落規則(2.4.6.2 を参照)と代償延長(2.4.6.3 を参照)が適用される。

(5-16)/ r/脱落規則（再掲）

$-r \rightarrow \phi / \underline{\quad} \#$
 $\underline{\quad} -C$
 $V \underline{\quad} i$ (随意)

以下, //ur-//の派生過程を示す(5-17)。

(5-17)

- //ur-// → r 脱落規則 → /u/ → 代償延長 → /uu/
- //ur-// + // -tar // → r 脱落規則 → /u-ta/ → 代償延長 → /uu-taa/

以下は存在動詞, コピュラ動詞の順で述べる。

5.3.1 存在動詞

存在（肯定）動詞の特徴は、存在するものの有生性に応じて使い分ける。有生物の場合には//ur-//「いる」を、無生物の場合には//ar-//「ある」を使う。否定の場合、有生性とは無関係に、//njaan-//（NEG-NPST）という形を取る。

- (5-18) a. *majunudu* *uu.*
maju=nu=du ur- ϕ .
猫=NOM=FOC いる-NPST
有生物・肯定：「猫がいる。」
- b. *kanu jaanna* *upuuupunu* *madunu* *aa.*
kanu jaa=n=na upuu~upu=nu madu=nu ar- ϕ
あの 家=DAT=TOP 大きな~RED=GEN 窓=NOM ある-NPST
無生物・肯定：「あの家には大きな窓がある。」
- c. *majunudu* *njaan.*
maju=nu=du njaan-.
お金=NOM=FOC NEG-NPST
有生物・否定：「お金がない。」
- d. *zinnudu* *njaan.*
zin=nu=du njaan-.
お金=NOM=FOC NEG-NPST
無生物・否定：「お金がない。」

5.3.2 コピュラ動詞

コピュラ動詞は主語の有生性の制限がなく、すべて//ar-//である。否定によって屈折する際、存在動詞と異なり、語幹//ar-//に語幹拡張接辞-a-を取って、否定接辞-nを付く。

- (5-19) a. *tarooja* *siitu..*
taroo=a siitu.
太郎=TOP 学生
「太郎は学生だ。」
- b. *tarooja* *siitu* *aran.*
taroo=a siitu ar-a-n.
太郎=TOP 学生 COP-THM-NEG.NPST
「太郎は学生ではない。」
- c. *tarooja* *siitudu* *jaataa.*
taroo=a siitu=du jar-tar.
太郎=TOP 学生=FOC COP-PST
「太郎は学生だった。」

コピュラ動詞//ar-//は/jar-/という異形態を有する。

(5-19c)に示すように、名詞述語に焦点助詞=du が付く場合、異形態 jar-が現れる。

この現象は宮古語全般に見られる。下地(2018:192)によると、伊良部島方言をはじめ宮古諸語における jar-は「名詞述語が焦点化（すなわち、焦点助詞に後続する場合）や、従属節でしか生じない異形態」であり、「定動詞直説法基本形非過去肯定、条件副動詞、理由副動詞、逆接の接続助詞を取る場合のみ見られる。」という。今後、さらなるデータを収集し、検証する。

6 PC 語

宮古語では一般に、ものの性質を表す語根（例：taka-「高い」）は、様々な語形成プロセスの入力になり、名詞にも動詞にも、またこれらとも異なる品詞（形容詞）にもなりうる。Shimoji (2008)は、このように、それ自体は特定の品詞性を持たず、様々な品詞の入力になる語根を、その意味的特徴に基づき、Property Concept root（以下では PC 語根）と呼んでいる。

新城方言には、PC 語根から派生する動詞形式、複合名詞形式、準複合名詞形式、形容詞形式が観察されている。以下では、PC 語の動詞形式、複合名詞形式、準複合名詞形式、形容詞形式としての用法を見ていく。

6.1 動詞として

PC 語根は、動詞化接辞-k を接続することで、PC 動詞語幹としてふるまうことができる。PC 動詞形式の屈折は表 6-1 にまとめる (？は未調査を表す)。

表 6-1. PC 動詞形式の屈折

					PC 動詞		状態動詞		
定動詞	肯定	直説法	基本形	非過去	jas-k+ar	jas-f nar-ur	ar		
				過去	jas-k+a-tar	?	a-tar		
	否定	直説法	基本形	命令	jas-k+ar-i	?	ar-i		
				非過去	jas-k+ar-a-n	jas-f njaa-n	njaa-n		
	否定			過去	?	?	?		
				命令					
副動詞	肯定	条件			jas-k-i-ba	?	?		
	否定	中止形			jas-k+ar-a-da	?	njaa-da		
		条件			jas-k+ar-a-dakka	?	njaa-dakka		

動詞化接辞は-k であり、両肢述語構造において、-k は-f に交替する。以下、(6-1a)は-k の例であり、(6-1b)は PC 語根からなる動詞語幹 pjaa-f と nar-「なる」からなる両肢述語の例である。

- (6-1) a. *kunu* *tuganjaa* *jaskaa.*
 kunu tugani=a jas-k ar- \emptyset .
 この ところ=TOP 安い-VLZ STA-NPST
 「このところは安い。」

b. *rensjuuu* *sigaa* *pjaafî* *narjuu*
 rensjuu=u si-ga pjaa-f nar-i+ ur- \emptyset
 練習=ACC する-CND 早い-VLZ なる-THM いる-NPST
 「練習すれば、早くなる。」

6.2 複合名詞として

複合名詞形式を派生する場合、PC 語根と名詞語根が直接結合する。他の宮古語の場合と同様、生産性が極めて高く、意味的にも透明（構成的）である（伊良部島方言について下地 2018:209 を参照）。他の複合語と同じく、随意的な連濁規則が適用される（6-2a, 6-2c）。

(6-2)

- a. //bžda+kii// → /bžda+gii/（低い+木）「低い木」
- b. /bžda+jaa/（低い+家）「低い家」
- c. //kagi+pana// → /kagi+bana/（きれいな+花）「きれいな花」
- d. /aparagi+midun/（きれいな+女性）「きれいな女性」

この形式が名詞であることは、以下のように項としても名詞述語としても機能することからわかる。

- (6-3) a. *ngjamas+tukunan* *uu.*
ngjamas+tukuna=n *ur- φ*
 うるさい+ところ=DAT いる-NPST
 「うるさいところにいる。」（項に立つ）
- b. *kunu* *jaaja* *bžda+jaa.*
kunu *jaa=a* *bžda+jaa.*
 この 家=TOP 低い+家
 「この家は低い家だ。」（述語に立つ）

6.3 準複合名詞として

準複合名詞形式（用語は下地 2018 に従う）は、PC 語根と形式名詞の *munu*「もの（物・者）」が直接結合する形式である。準複合名詞形式と複合名詞形式それぞれのふるまいを以下の表 6-2 に示す。

表 6-2. 準複合名詞形式と複合名詞形式のふるまい

	意味的特徴	統語的特徴	
	実詞であるかどうか (本当の物・者をさすかどうか)	項になれる かどうか	述語になれる かどうか
複合名詞形式	○	○	○
準複合名詞形式	×	×	○

以下、*munu* の例を挙げる。（6-4a）は複合名詞形式（実詞、項に立つ）であり、（6-4b）は準複合名詞形式（非実詞、述語に立つ）である。

- (6-4) a. *hunna* *mžž+munu* *zaukaa.*
 hun=na *mžž+munu=nu=du* *zau-k+ar- φ*
 本=TOP 新しい+もの=NOM=FOC 上等-VLZ+STA-NPST
 「本は新しいものがいい。」(複合名詞形式)
- b. *bajaa* *mmarizimanudu* *kanasi+munu.*
 ba=a=a *mmarizma=nu=du* *kanas+munu.*
 1SG=TOP=TOP 故郷=NOM=FOC 懐かしい+DHD
 「私は故郷が懐かしい。」(準複合名詞形式)

6.4 形容詞として

形容詞は、3.2.3で述べた通り、PC語幹(PC語根(6-5a)、または「PC語根-接辞」からなるPC語幹(6-5b))の重複形から派生する。この時、前半分の語幹末の母音を伸ばす。

- (6-5)
- a. /pisii~pisi/ (寒い~RED) 「寒い」
 b. /pisi-gii~pisi-gi/(寒い-LCTN~RED) 「寒そう」

形容詞形式は、以下の用法がある。

- (6-6)
- a. 単独で述語になる。(6-7a)
 b. 名詞の修飾部になる。(6-7b)
 c. 副詞として動詞を修飾する。(6-7c)
 d. 存在動詞やコピュラ動詞と合わせて、動詞の両肢述語句の主動詞になる。(6-7d)

- (6-7) a. *kunu mamaažza* *ngjamasii~ngjamasii.*
 kunu mamaaž=ža ngjamass~ngjamas.
 この あたり=TOP うるさい~RED
 「このあたりはうるさい。」
- b. *kanu jaanudu* *upuu~upunu* *mudunu aa.*
 kunu jaa=nu=du upuu~upu=nu mudu=nu ar- φ.
 あの 家=NOM=FOC 大きい~RED=GEN 窓=NOM ある-NPST
 「あの家は大きい窓がある。」
- c. *utunasii~utunasidu* *panasi.*
 utunass~utunas=du panas-i- φ.
 おとなしい~RED=FOC 話す-THM-IMP
 「おとなしく話せ。」
- d. *saii~saidu* *uutaa.*
 sai=du ur=tar.
 簡単~RED=FOC いる-PST
 「(「試験、どうだった?」に対して) 簡単だった。」

7 名詞句

名詞句は、述語の項になることができ、述部に立つときにはコピュラ動詞を伴う。以下では、名詞句の基本構造、格助詞、修飾部と主要部の順で述べる。

7.1 名詞句の基本構造

名詞句では、修飾部が主要部に先行する。名詞句全体に対する格助詞と取り立て助詞は主要部のみつく。以下は *pžtu* 「人」 が修飾されている例である。

- (7-1) a. *jamatunu* *pžtu.*
[jamatu=nu]修飾部 [pžtu]主要部
日本=GEN 人
「日本の人」(名詞が名詞を修飾する)
- b. *hunnu* *jumjuu* *pžtu.*
[hun=nu] 本=GEN *jum-i* 読む-THM *ur- ϕ*]修飾部 [pžtu]主要部
人
「本を読んでいる人」(動詞が名詞を修飾する)

他の宮古語方言には、主要部を欠く名詞句 (truncated possessive construction; Martin 1975, 下地 2018) がみられる (例えば、「あいつのが？」)。新城方言のデータは取れておらず、今後の課題にする。

7.2 格助詞

格助詞のリストを、表 7-1 に示す。

表7-1.新城方言の格標示形式と機能

主格・属格	=ga/=nu
対格1	=u
対格2	=a
与格	=n
方向格	=nkai
具格	=sii
共格	=tu
比較格	=juzza
奪格	=kara
限界格	=gami

以下ではそれぞれの詳細について述べていく。

7.2.1 主格・属格

主語と所有者（名詞句の従属部）は=ga, =nuで標示する。主格と属格助詞は同じ形態素としてみる。ただし、グロスを振るとき、機能に応じて、主格は=NOM, 属格は=GENにする。

- (7-2) a. *pavnu du sinjuu.*
 pav=**nu**=du sn-i ur- ϕ
 蛇=NOM=FOC 死ぬ-THM PROG-NPST
 「蛇が死んでいる。」(主格=nu)
- b. *mažnu žž*
 maž=**nu** žž
 米=GEN お握り
 「米のお握り」(属格=nu)
- c. *sinsiigadu kžtaa.*
 sinsii=**ga**=du kž-tar.
 先生=NOM=FOC 来る-PST
 「先生が来た。」(主格= ga)
- d. *kaiga ujaa isjaa.*
 kari=**ga** uja=a isjaa.
 彼=GEN 父=TOP 医者
 「彼のお父さんは医者だ。」(属格= ga)

新城方言の=ga/=nu分布は以下の表7-2にまとめる(?)は未調査)。

表7-2.新城方言の=ga(G)/=nu(N)分布⁵

	1/2人称代名詞	指示代名詞	再帰代名詞	固有名詞	年上の親族名詞	社会的地位名詞	数詞	疑問代名詞「誰」	年下の親族名詞	その他の人間	動物	無生物
例	私 あなた	それ 彼	自分	太郎	父	先生	三 日	誰	弟 娘	人 女	犬	太陽
指示機能	1/2人称指示・前方照応代名詞的に使える								使えない			
主格	G	G	G	G	N	G	?	G	N	N	N	N
属格	G	G	G	G	N	N	N	G	N	N	N	N

以下、具体例を挙げる。

⁵表のまとめ方は下地(2018)に参考した。

- (7-3) a. *ba=gaa* *siitaa.*
ba=gaa *si-i-tar.*
 1SG=NOM する-THM -PST
 「私がしたの。」(1人称代名詞・主格)
- b. *baga* *uja*
ba=gaa *uja*
 1SG =GEN 父
 「私の父」(1人称代名詞・属格)
- c. *kaiga* *siitaa.*
kai=gaa *si-i-tar.*
 彼=NOM する-THM -
 PST
 「彼がしたの。」(指示代名詞・主格)
- d. *kaiga* *uja*
kai=gaa *uja*
 彼 =GEN 父
 「彼の父」(指示代名詞・属格)
- e. *duugadu* *masi.*
duu=gaa=du *mas.*
 RFL=NOM=FOC まし
 「(彼より) 自分のほうがました。」(1人称代名詞・属格)
- f. *duuga* *ffa*
duu=gaa *ffa*
 RFL=GEN 子供
 「自分の子供」(再帰代名詞・属格)
- g. *tarooga* *hanakou* *mminzitaa.*
taroo=gaa *hanako=u* *mminz-i-tar..*
 太郎=NOM 花子=ACC 殴る-THM-PST
 「太郎が花子を殴った。」(固有名詞・主格)
- h. *tarooga* *ujaa* *isjaa.*
taroo=gaa *uja=a* *isjaa.*
 太郎=GEN 父=TOP 医者
 「太郎の父は医者だ。」(固有名詞・属格)
- i. *ujanudu* *isjaa.*
uja=nu=du *isjaa.*
 父=NOM=FOC 医者
 「(お母さんじゃなく,)お父さんが医者だ」(年上の親族名詞・主格)
- j. *ujanu* *usigutu*
uja=nu *usi+gutu*
 父=GEN 教え+こと

「お父さんの教え」(年上の親族名詞・属格)

- k. *sinsiigadu* *kžtaa.*
sinsi=ga=du *kž-tar.*
 先生=NOM=FOC 来る-PST
 「先生が来た。」(社会的地位名称・主格)
- l. *sinsiinu* *hun*
siisii=nu *hun*
 先生=GEN 本
 「先生の本」(社会的地位名称・属格)
- m. *mižkanu* *ungž*
mižka=nu *ungž*
 3日=GEN 恩
 「3日の恩」(数詞・属格)
- n. *tauga* *soozzu* *siitaaga*
tau=ga *sooz=zu* *si-i-taa=ga*
 誰=NOM 掃除=ACC する-THM-PST=Q.FOC
ssan.
ss-a-n.
 知る-THM-NEG.NPST
 「誰が掃除したか、知らない。」(疑問代名詞・主格)
- o. *tauga* *panasi?*
tau=ga *panas?*
 誰=GEN 話
 「誰の話？」(疑問代名詞・属格)
- p. *ututunudu* *siitu.*
ututu=nu=du *siitu.*
 弟=NOM=FOC 学生
 「弟が学生だ。」(年下の親族名詞)
- q. *midun+vva=nu* *sasaki+juuž*
midun+vva=nu *sasaki+juuž*
 娘=GEN 結婚式
 「娘の結婚式」(年下の親族名詞・属格)
- r. *innudu* *sintaa.*
in=nu=du *sn-tar.*
 犬=NOM=FOC 死ぬ-PST
 「犬が死んだ。」(動物・主格)
- s. *innu* *baa*
in=nu *baa*
 犬=GEN 齒

「犬の歯。」(動物・属格)

t.	<i>tidanudu</i>	<i>agarii</i>
	<i>tidanu=du</i>	<i>agar-i-i</i>
	太陽=NOM=FOC	昇る-THM-SEQ
	<i>kisjuu</i>	
	<i>kis-i</i>	<i>ur-φ</i>
	来る-SEQ	PROG-NPST
	「太陽が昇って来ている。」(無生物・主格)	
u.	<i>mažnu</i>	žž
	<i>maž=nu</i>	žž
	米=GEN	お握り
	「米のお握り」(無生物・属格)	

以下、疑問代名詞「誰」の主格例を挙げる。現時点、従属節の例しか取れないが、3.3.2で述べたように、新城方言は主格に義務的に格標示されるため、*tau=ga* の=ga は疑問専用の焦点マーカーではなく、主格標識とみるべきである。

(7-4)	<i>tauga</i>	<i>soozzu</i>	<i>siitaaga</i>	<i>ssan.</i>
	<i>tau=ga</i>	<i>sooz=zu</i>	<i>si-i-taa=ga</i>	<i>ss-a-n.</i>
	誰=NOM	掃除=ACC	する-THM-PST=Q.FOC	知る-THM-NEG.NPST
	「誰が掃除したか、知らない。」			

7.2.2 対格

直接目的語を標示する対格は=u と=a である。

(7-5)	a.	<i>icimai</i>	žžuu	<i>faan.</i>	
		<i>icmai</i>	žžu=u	<i>fa-a-n.</i>	
		いつも	魚=ACC	食べる-THM-NEG.NPST	
		「いつも魚を食べない。」			

宮古諸語には、第二対格=a が存在し、主題助詞=a と同一形態素とみるか(林 2013 など)、同音異義の別形態素とみるか(下地 2018、セリック 2017 など)、見解が分かれる。本論文では、ひとまずグロスとして、ACC2 にする。

第二対格=a の出現環境について、下地(2018)とセリック(2017)によると、以下の特徴がみられるという。

(7-6) 第二対格=a の出現環境の傾向(下地 2018、セリック 2017)

- 持続、繰り返す、結果継続を表す非完結アスペクトに生じる傾向にある。
- 第二対格目的語が動詞直前位置に生じる傾向にある。
- 自動詞主語の標示に生じることがある。

d. 中止形節に生じる傾向にある。

現時点では、手持ちのデータは(7-7)の3例のみである。そのうち、(7-7a)の第二対格=aは連体節の中の自動詞主語を標示しているため、(7-6a,b,c)と一致する。(7-7b)は中止形節に生じ、(7-6d)と一致する。(7-7c)は自動詞主語であり、(7-6b)に当てはまるが、与格標示の所有者主語であるため、所有者主語にも生じうることが分かった。

- (7-7) a. *kanamazza jamjuunu* *ututunu kaarin,*
kanamaz=za jam-i-i=nu ututu=nu kaari=n,
頭=ACC2 痛む-THM-SEQ=GEN 妹=NOM かわり=DAT
tarooju pirasitaa.
taroo=u pir-as-i-tar.
太郎=ACC 行く-CAUS-THM-PST
「頭が痛い妹の代わりに、太郎を行かせた。」
- b. *panassa sii,*
panas=sa si-i,
話=ACC2 する-SEQ
「話をして、…」
- c. *taroonna tužža uran.*
taroo=n=na tuž=ža ur-a-n..
太郎=DAT=TOP 嫁=ACC2 いる-THM-NEG.NPST
「太郎には嫁がいない。」

対格は、被動作主(7-8)、非使役者(7-9)、経路(7-10)を標示する。

- (7-8) *tarooga hanakou mminzitaa.*
taroo=ga hanako=u mminz-i-tar.
太郎=NOM 花子=ACC 殛る-THM-PST
「太郎が花子を殴った。」(被動作主)

- (7-9) *ututuu ažkasitaa.*
ututu=u ažk-as-i-tar.
弟=ACC 行く-CAUS-THM-PST
「弟を行かせた。」(非使役者)

- (7-10) a. *mccu ažkž.*
mc=cu ažk-ž- ϕ
道=ACC 歩く-THM-NPST
「道を歩く。」(経路)

7.2.3 与格と方向格

与格は=n である(7-11)。

- (7-11) a. *isun* *bžž.*
 isu=n bž-ž- \emptyset
 椅子=DAT 座る-THM-IMP
 「椅子に座れ。」
- b. *banun* *fiiru.*
 banu=n fii-ru.
 1SG=DAT くれる-IMP
 「私に下さい。」

場所格は=nkai である(7-12)。

- (7-12) *nzankai* *ikitti* *kžtaaga?*
 nza=nkai ik-i=tti kž-taa=ga?
 どこ=ALL 行く-THM=SEQ2 来る-PST=Q.SFP
 「どこに行ってきたの？」

しかし、(7-13)のように、与格と方向格の使用領域が重なることがある。

- (7-13) a. *unu* *koossu* *bankai* *fiiru.*
 unu koos=su ban=nkai fii-ru.
 その お菓子=ACC 1SG =ALL くれる-IMP
 「そのお菓子、私に下さい。」
- b. *unu* *koossu* *banun* *fiiru*
 unu koos=su banu=n fii-ru
 その お菓子=ACC 1SG =DAT くれる-IMP
 「そのお菓子、私に下さい。」

現時点で分かった新城方言のデータのみ表7-3にまとめる。

表 7-3. 新城方言における与格と方向格の用法 (下地 2018 に基づく)

	より場所志向										より方向志向			
	場所	時間	所有者	経験者	受身動作主	変化結果① ⁶	被使役者	受益者	着点① ⁷	着点② ⁸	移動の目標	変化結果② ⁹	発話相手	
与格	○	○	○	○	○	○	×	○	○	?	×	?	○	
方向格	×	×	?	?	?	?	×	○	×	○	○	?	○	

以下、左から右へという順に例示する。

- (7-14) a. *paž+ſicindu* *kurumanu* *icidai*
 paž+fc=n=du kuruma=nu icdai
 入口=DAT=FOC 車=NOM 一台
 tumarjuu.
 tumar-i ur- ϕ .
 止まる-THM PROG-NPST
 b. **paž+ſicinkaidu* *kurumanu* *icidai*
 **paž+fc=nkai=du* *kuruma=nu* *icdai*
 入口=ALL=FOC 車=NOM 一台
 tumarjuu.
 tumar-i ur- ϕ
 止まる- THM PROG-NPST
 「入口で車が一台止まっている。」(場所: 与格○; 方向格×)

- (7-15) a. *tarooja* *sanzindu* *jaankai* *mudii*
 taroo=a sanzi=n=du jaa=nkai mud-i-i
 太郎=TOP 3 時=DAT=FOC 家=ALL 戻る-THM-SEQ
 kžtaa.
 kž-tar.
 来る-PST
 b. *tarooja* *i*sanzinkaidu* *jaankai* *mudii*
 taroo=a *i*sanzi=nkai=du jaa=nkai mud-i-i
 太郎=TOP 3 時=ALL=FOC 家=ALL 戻る-THM-SEQ

⁶ 「A が B になる」(下地 2018)

⁷ 「(移動+) 停滞」(下地 2018); 下地(2018:124)によると、「停滞局面が前面に出る着点①は場所志向性が高く、移動局面が前面に出る着点②は方向志向性がそれに比べて強まる」という。

⁸ 「移動+停滞」(下地 2018)

⁹ 「A が B にする」(下地 2018)

kžtaa.

kž-tar.

来る-PST

「太郎は 3 時に家に戻った。」(時間：与格○；方向格×)

(7-16) *taroonna* *tužža* *uran.*

taroo=n=na *tuž=ža* *ur-a-n.*

太郎=DAT=TOP 嫁=ACC2 いる-THM-NEG.NPST

「太郎には嫁がない。」(所有者：与格○；方向格？)

(7-17) *taroonna* *baga* *kžmunuu*

taroo=n=na *ba=g a* *kžmunu=u*

太郎=DAT=TOP 1SG=GEN 気持ち=ACC

ssanpazi.

ss-a-n=paz.

分かる-THM-NEG=LCTN

「太郎には私の気持ちをわからないだろう。」(経験者：与格○；方向格？)

(7-18) *hanakoga* *taroon* *mminzaritaa.*

hanako=ga *taroo=n* *mminz-ari-tar.*

花子=NOM 太郎=DAT 殴る-PASS-PST

「花子が太郎に殴られた。」(受動動作主：与格○；方向格？)

(7-19) *kžsigacikara* *kjuusjuudaigakunu* *siitun*

kžsigac=kara *kjuusjuudaigaku=nu* *siitu=n*

今年の 4 月=ABL 九州大学=GEN 学生=DAT

nagž *gamata.*

nagž- φ *gamata.*

なる-THM-NPST 予定

「今年の 4 月から、九州大学の学生になる予定だ。」(変化結果①：与格○；

方向格？)

(7-20) a. *ututuu* *ažkasitaa.*

ututu=u *ažk-as-i-tar.*

弟=ACC

行く-CAUS-THM-PST

b. **ututun* *ažkasitaa.*

**ututu=n* *ažk-as-i-tar.*

弟=DAT

行く-CAUS-THM-PST

c. **ututunkai* *ažkasitaa.*

**ututu=nkai* *ažk-as-i-tar.*

弟=ALL

行く-CAUS-THM-PST

「弟を (*に) 行かせた。」(非使役者：与格×；方向格×)

(7-21)	a.	<i>mmagan</i>	<i>hunnu</i>	<i>jumii</i>	<i>turasitaa.</i>
		<i>mmaga=n</i>	<i>hun=nu</i>	<i>jum-i-i</i>	<i>turas-tar.</i>
		孫=DAT	本=ACC	読む-THM-SEQ	あげる-PST

「孫に本を読みあげた。」(受益者:与格○)

b.	<i>bankai</i>	<i>narasii</i>	<i>fiiru.</i>	
	<i>ban=nkai</i>	<i>naras-i-i</i>	<i>fiiru.</i>	
	1SG=ALL	教える-THM-SEQ	くれる-IMP	

「私に教えてください。」(受益者:方向格○)

(7-22)	a.	<i>tarooja</i>	<i>isindu</i>	<i>bžžjuu.</i>	
		<i>taaroo=a</i>	<i>is=n=du</i>	<i>bžž-i-i</i>	<i>ur-φ.</i>
		太郎=TOP	椅子=DAT=FOC	座る-THM-SEQ	PROG-NPST

b.	<i>tarooja</i>	<i>*isinkaidu</i>	<i>bžžjuu.</i>	
	<i>taaroo=a</i>	<i>*is=nkai=du</i>	<i>bžž-i-i+</i>	<i>ur-φ.</i>
	太郎=TOP	椅子=ALL=FOC	座る-THM-SEQ	PROG-NPST

「太郎は椅子に座っている。」(着点①:与格○;方向格×)

(7-23)	a.	<i>tarooja</i>	<i>sanzindu</i>	<i>*jaan</i>	<i>mudii</i>
		<i>taroo=a</i>	<i>sanzi=n=du</i>	<i>*jaan=n</i>	<i>mud-i-i</i>
		太郎=TOP	3時=DAT=FOC	家=DAT	戻る-THM-SEQ
		<i>kžtaa.</i>			

来る-PST

b.	<i>tarooja</i>	<i>sanzindu</i>	<i>jaankai</i>	<i>mudii</i>
	<i>taroo=a</i>	<i>sanzi=n=du</i>	<i>jaan=nkai</i>	<i>mud-i-i</i>
	太郎=TOP	3時=DAT=FOC	家=ALL	戻る-THM-SEQ
	<i>kžtaa.</i>			

来る-PST

「太郎は3時に家に戻った。」(着点②:与格×;方向格○)

(7-24)	a.	<i>tarooja</i>	<i>ututun</i>	<i>panasjuu.</i>	
		<i>taaroo=a</i>	<i>ututu=n</i>	<i>panas-i-i</i>	<i>ur-φ.</i>
		太郎=TOP	弟=DAT	話す-THM-SEQ	PROG-NPST

「太郎は弟に話しかけた(話している)。」

b.	<i>tarooja</i>	<i>ututunkai</i>	<i>panasjuu.</i>	
	<i>taaroo=a</i>	<i>ututu=nkai</i>	<i>panas-i-i</i>	<i>ur-φ.</i>
	太郎=TOP	弟=ALL	話す-THM-SEQ	PROG-NPST

「太郎は弟に話しかけた(話している)。」(発話相手:与格○;方向格○)

与格と方向格のデータ補足とさらなる使い分けは今後の課題として扱う。

7.2.4 具格

具格は=sii で標示する(7-25)。

- (7-25) *pasamsii cimjuu kisi.*
pasam=sii cmi=u kis-i- ϕ .
はさみ=INST 爪=ACC 切る-THM-IMP
「はさみで爪を切れ。」

7.2.5 共格

共格は=tu で標示する(7-25)。「A と B」を表す時, A=tu B と A=tu B=tu といった2つの言い方が存在する。

- (7-26) a. *bantu akira=ga ikžtaa.*
ban=tu akira=ga ik-ž-tar.
1SG=ASC あきら=NOM 行く-THM-PST
「私とあきらが行った。」
- b. *akiratu bantu futaa ikadina?*
akira=tu ban=tu futaa ik-a-di=na?
あきら=ASC 1SG=ASC 二人 行く-THM-INT=SFP
「あきらと私の二人が行くんだね？」

宮古諸語における共格はさらに、述語の周辺項としての機能を持つ、と下地(2018)が指摘しているが、現時点では新城方言の例は確認できていない。

7.2.6 比較格

=juzza は比較の基準を標示する。以下の(7-27)に示すように、=juzza が使われる場合、形容詞述語は/PCkaa(/PC-k-ar- ϕ //)という形を取る。

- (7-27) *tarooja ututujuzza pudunudu takakaa*
taroo=a ututu=juzza pudu=nu=du taka-k+ar- ϕ .
太郎=TOP 弟=CMP 体=NOM=FOC 高い-VLZ+STA-NPST
「太郎は弟より背が高い。」[田平 2018:9(13)]

田平(2018:10)によると、新城方言の比較格は、宮古語の他の方言とは大きく異なる形であるが、伊良部方言の比較格助詞=jaruu との類似性は高く、=jaruu と=juzza はともに「～よりは」という比較の意味を持つ語彙が語源となっている可能性は高いという。

7.2.7 奪格

奪格は=kara で標示し、場所や時間の起点を表す(7-28)。

- (7-28) a. *kamakaradu* *kurumanu* *kžtaa.*
kama=kara=du kuruma=nu kž=tar.
遠く=ABL=FOC 車=NOM 来る-PST
「遠くから車が来た。」

周辺方言である伊良部島方言における奪格はさらに、移動手段、通過経路、取り立て助詞として優先を表す機能を持つ(下地 2018)というが、現時点では新城方言のデータは揃えておらず、今後の課題とする。

7.2.8 限界格

限界格は=gami で標示する(7-29)、周辺項の限界点を表す。

- (7-29) *tarooja* *jaagamidu* *ažkii* *piitaa.*
taroo=a jaa=gami=du ažk-i-i pii=tar.
太郎=TOP 家=LIM=FOC 歩く-THM-SEQ 行く-PST
「太郎は家まで歩いて帰った。」 [田平 2018:9(15)]

周辺方言である伊良部島方言における限界格はさらに、取り立て助詞として対比を表す機能を持つ(下地 2018)というが、現時点では新城方言の例は確認できていない。

7.3 修飾部

名詞句の修飾部には、名詞句、連体節、連体詞、形容詞が現れる。それぞれ例を以下に挙げる(7-30)。

- (7-30) a. *mažnu* ŽŽ
[maž=nu] ŽŽ
米=GEN お握り
「米のお握り」 (名詞句 : 名詞=nu)
b. *vvaga* ſſa
[vva=ga] ſſa
2SG=NOM 子供
「あなたの子供」 (名詞句 : 名詞=ga)
c. *pagžnu* *pjaamunu* *pžtu*
[pagž=nu] pjaa+munu] pžtu

足=NOM	速い+DHD	人
「足が速い人」(連体節:形容詞述語)		
d. <i>vvaga</i>	<i>miitaa</i>	<i>sibai</i>
[vva=gā] 見る-PST 芝居		
2SG=NOM		
「あなたが見た芝居」(連体節:動詞述語)		
e. <i>nnamamai</i>	<i>siitu</i>	<i>dusi</i>
[nnama=mai]	<i>siitu]</i>	<i>dus</i>
今=ADT	学生	友達
「今も学生である友達」(連体節:名詞述語)		
f. <i>unu</i>	<i>ffa</i>	
[unu]	<i>ffa</i>	
この	子供	
「この子供」(連体詞)		
g. <i>takaatakanu</i>	<i>pžtu</i>	
[takaa~taka=nū]	<i>pžtu</i>	
高い~RED=GEN	人	
「(背の)高い人」(形容詞)		

7.3.1 連体修飾構造 (現在肯定形)

新城方言における連体節について、田平(2018)は、動作進行を表す *juu* 形と、結果継続を表す *iinu* 形という 2 つの形が存在することを指摘する(表 7-4)。

表 7-4. 新城方言における連体節動詞の現在肯定形
(田平 2018 を基づき、筆者が作成。グロスの表記を多少変えた)

V	-THM	PROG-NPST	N
	(-THM)-SEQ	=GEN	

- (7-31) a. *budurjuu* *pžtu*
 budur-i ur- \emptyset *pžtu*
 踊る-THM PROG-NPST 人
 「踊っている人」[田平 2018:13(16a)]
- b. *buduriinu* *pžtu*
 budur-i-i=nu *pžtu*
 踊る-THM-SEQ=GEN 人
 「踊っている人(踊り子)」[田平 2018:13(16b)]

さらに、前接する動詞について、*juu* 形のみ許容されるもの、*iinu* 形のみ許容されるもの、*juu* 形と *iinu* 形どちらも許容されるものといった 3 つのタイプに分類できる(田平 2018)。田平(2018)は工藤(2014)の動詞分類を基づき、アスペクトの観点から、調査を行った。結論を下すためのデータが足りなかったが、観察された傾向をもとに、連体節動詞分類について以下の仮説を立てる (J は *juu* 形のみ取れることを、I は *iinu* 形のみ取れる

ことを JI は両方取れることを表す)。

表 7-5. 新城方言における連体節動詞の現在肯定形と動詞の関係
(田平 2018 に基づき, 筆者が作成)

動詞分類	形式
主体動作動詞(7-32a)	J
主体変化動詞(7-32b)	I
語彙的アスペクト中立動詞(7-32c,d)	JI

以下, それぞれ例示する(7-32)。

- (7-32) a. *žžuu* *jakjuu* *kivs̥i*
 žžu=u jak-i+ ur- φ kivs
 魚=ACC 焼く-THM+ PROG-NPST 煙
 「魚を焼いている煙」 [田平 2018:17(19)]
- b. *bariinu* *kupin*
 bari-i=nu kupin
 割れる-SEQ=GEN ビン
 「割れているビン」 [田平 2018:18(21)]
- c. *kabjuu* *sazi*
 kab-i+ ur- φ sazi
 かぶる-THM PROG-NPST タオル
 「かぶっているタオル」 [田平 2018:27(45a)]
- d. *kabiinu* *sazi*
 kab-i-i=nu sazi
 かぶる-THM-SEQ=GEN タオル
 「かぶっているタオル」 [田平 2018:27(45b)]

この現象は, 現時点では他の宮古方言に観察されておらず, 新城方言ならではの現象であると言える。この現象についてさらなる調査を行い, 今後の課題とする予定である。

7.4 主要部

主要部には, 一般名詞(7-33)と形式名詞(7-34)が現れる。形式名詞には, *kutu*「こと」, *gamata*「予定」が挙げられる。そのうち, *gamata*「予定」は, (7-34b)が示すように, 述語の位置にのみ現れ, 項に立つ例は確認できておらず, *gamata* が文法化され, 終助詞になりつつある可能性がある。その点について, 今後さらなる調査を行う予定である。

- (7-33) *budurjuu* *pžtu*
 budur-i ur- φ [pžtu]_{主要部}
 踊る-THM PROG-NPST 人
 「踊っている人」 [田平 2018:13(16a)]

- (7-34) a. *ssain* *kutunu* *aa.*
 ss-ai-n kutunu ar- ϕ .
 知る-POT-NEG こと ある-NPST
 「わからないことがある。」
- b. *siitun* *nagž* *gamata*
 siitu=n nag-ž- ϕ gamata
 学生=DAT なる-THM-NPST 予定
 「学生になる予定だ。」

7.1 に述べたように、主要部を欠く名詞句が存在する可能性があるが、新城方言のデータは取れておらず、今後の課題にする。

8 述語の構造

以下では、動詞述語、名詞述語について概観する。

8.1 動詞述語

8.1.1 主動詞と補助動詞

主動詞（以下、V₁）と補助動詞（以下、V₂）の句の構造は以下(8-1)のようになる。

(8-1) 主動詞と補助動詞の句の構造

V₁語幹(-THM)(-SEQ) + V₂語幹-屈折接辞

現時点で分かった限り、補助動詞の位置に立ちうる語幹は以下の表 8-1 にまとめた。

表 8-1.補助動詞語幹一覧

	補助動詞としての日本語訳	語幹
存在動詞	～ている	ur- 「いる」
存在否定動詞	～しまった	njaa- 「ない」
授受動詞	(以下詳述)	fii-
		mura-
		turas-
試行動詞	～てみる	mii- 「みる」
方向動詞	～てくる	kž-/kuu- 「くる」
	～ていく	piir- 「いく」

以下、それぞれ例を挙げて、説明する。

8.1.1.1 「～ている」

V₁の性質によって、V₂に立つ存在動詞//ur//「いる」は、(1)動作の進行を、(2)状態・結果の継続を表す。

補助動詞として屈折する場合、定動詞は(1)動作の進行と(2)状態の継続とともに、V₁+ur-といった形である(8-2)。

- (8-2) a. *aminudu* *ffjuu.*
ami=nu=du ff-i ur- φ .
雨=NOM=FOC 降る-THM PROG-NPST
「雨が降っている。」（主動詞が動作動詞、動詞の進行）
- b. *avvanudu* *cikjuu*

avva=nu=du	ck-i	ur- ϕ .
油=NOM=FOC	付く-THM	PROG-NPST
「油が付いている。」(主動詞が状態動詞, 動詞の状態継続)		

一方, 副動詞のうち連体節の場合, (1)動作の進行は *juu* 形を使い(8-3a), (2)状態・結果の継続は *iinu* 形を用いる(8-3b) (7.3.1 を参照)。

(8-3) a. <i>budurjuu</i>	<i>pžtu</i>
<i>budur-i</i>	<i>ur- ϕ</i>
踊る-THM PROG-NPST 人	
「踊っている人」(動作の進行)	
b. <i>buduriinu</i>	<i>pžtu</i>
<i>budur-i-i=nu</i>	<i>pžtu</i>
踊る-THM-SEQ=GEN 人	
「踊っている人(踊り子)」(状態・結果の継続)	

8.1.1.2 「～てしまった」

存在否定動詞 *njaa-*「ない」が *V₂* に立つ場合, 形態上は非過去形であるが, 意味上は「～てしまう」という動作の完了を表す。場合によって, 動作の完了によって, 好ましくない結果になるというニュアンスが含まれる。(以下の [] は複合語幹を表す)

(8-4) a. <i>ffataaja</i>	<i>faa</i>	<i>njaanpazi</i>
<i>ffa-taa=a</i>	<i>fa-a</i>	<i>njaa-n=paz</i>
子供-PL=TOP 食べる-THM		
「子供が食べて終わった。/ (友達のために用意したお土産を) 子供が食べてしまった。」		
b. <i>kuruman</i>	<i>basiikisi</i>	<i>njaan.</i>
<i>kuruma=n</i>	[<i>bas-i-i+kis-i</i>]	<i>njaa-n.</i>
車=DAT	忘れる-THM-SEQ+来る-SEQ	RSL-NPST
「車に忘れてきました。」		

8.1.1.3 「～てくれる」, 「～てあげる」, 「～てもらう」

主動詞の場合, 日本語の「くれる」(8-5a)と「やる・あげる」(8-5b)は *fi-i-* に対応し, 「もらう」は *mura-* に対応する(8-5c)。

(8-5) a. <i>unu</i>	<i>koosu</i>	<i>bankai</i>	<i>fiiru.</i>
<i>unu</i>	<i>koos=su</i>	<i>ban=nkai</i>	<i>fi-i-ru.</i>
その お菓子=ACC 1SG=ALL くれる-IMP			
「そのお菓子, 私に下さい。」			

- b. *unu* *koosu* *vvankai* *fidi.*
 unu koos=su vva=nkai fii-di.
 その お菓子=ACC 2SG=ALL あげる-INT
 「そのお菓子、あなたにあげよう。」
- c. *mmagakara* *hunnu* *murautaa.*
 mmaga=kara hun=nu mura-u-tar.
 孫=ABL 本=ACC もらう-THM-PST
 「孫から本をもらった。」

一方、補助動詞として、「～てあげる」「～てやる」は *turas-* に対応し(8-6), 「～てもらう」は *mura-* に対応する(8-7)。

- (8-6) *mmagan* *hunnu* *jumii* *turasitaa.*
 mmaga=n hun=nu jum-i-i turas-tar.
 孫=DAT 本=ACC 読む-THM-SEQ あげる-PST
 「孫に本を読みあげた。」

- (8-7) *mmagan* *hunnu* *jumii* *murautaa.*
 mmaga=n hun=nu jum-i-i murau-tar.
 孫=DAT 本=ACC 読む-THM-SEQ もらう-PST
 「孫に本を読みでもらう。」

「～てくれる」について、平叙文において、*fii-* が用いられるが、*turas-* が使えるか否か、話者の SE 氏と TN 氏の意見が分かれる(8-8)。命令文の場合、*fii-* と *turas-* 両方使えるが、話者によると、*fii-* の受益者は一人称であり、*turas-* の受益者は話し手と関連する他人（例えば、(8-9b)の「私の子供」）である(8-9)。

- (8-8) a. *mmaganudu* *hunnu* *jumii* *fiitaa.*
 mmaga=nu=du hun=nu jum-i-i fii-tar
 孫=NON=FOC 本=ACC 読む-THM-SEQ くれる-PST
 「孫が本を読んでくれた。」
- b. *mmaganudu* *hunnu* *jumii* *?turasitaa.*
 mmaga=nu=du hun=nu jum-i-i ?turas-tar.
 孫=NON=FOC 本=ACC 読む-THM-SEQ くれる-PST
 「孫が本を読んでくれた。」

- (8-9) a. *bankai* *munuu* *cifii* *fiiru.*
 ban=nkai munu=u cif-i-i fii-ru.
 1SG=ALL もの=ACC 作る-THM-SEQ くれる-IMP
 「私にものを作ってくれ。」
- b. *baga* *ffankai* *munuu* *cifii* *fiiru.*
 ba=ga 子供=nkai munu=u cif-i-i fii-ru.
 1SG=GEN 子供=ALL もの=ACC 作る-THM-SEQ くれる-IMP
 「私の子供にものを作ってくれ。」

8.1.1.4 「～てみる」

試行補助動詞の *mii*-は「～してみる」の意味を表す。*mii-ru* (みる-IMP)といった命令形で現れ、命令の語気を和らげるために語尾を上げて発音される。

- (8-10) a. *kisi* *miiru*
kis-i mii-ru.
来る-SEQ 見る-IMP
「来てみて。」
- b. *sirabii* *miiru.*
sirabi-i mii-ru
調べる-SEQ 見る-IMP
「調べてみて。」

下地(2018)によると、伊良部島方言では経験「～したことがある」を表すこともできるが、現時点、新城方言ではそういう例は確認していないが、与那霸 (2003)の『城辺町スマフツ辞典』にこういう用法の例文がある(8-11)。しかし、この辞書は城辺方言全般に対する辞書であり、この例文は新城方言に当てはまるか否かは今後確認する必要がある。

- (8-11) *sirabjaa* *miin.*
sirabi-i=a mii-n.
調べる-SEQ=TOP みる-NEG.NPST
「調べたことがない。」 [与那霸 2003:218]

8.1.1.5 「～てくる」

求心方向補助動詞の *kž-/kuu-*は日本語の「～てくる」に対応し、話者のいる場所に向かっていく動詞を表す。

- (8-12) a. *ikii* *kžtaa.*
ik-i-i kž-tar.
行く-THM-SEQ 来る-PST
「行ってきた。」
- b. *banuu* *saarii* *kuu.*
banu=u saar-i-i kuu
油=ACC 買う-THM-SEQ 来る.IMP
「油を買ってこい。」

8.1.1.6 「～ていく」

求心方向補助動詞の *piir-* は日本語の「～ていく」に対応し、聞き手のいる場所に向かつていく動詞を表す(8-13)。

(8-13)	<i>tarooja</i>	<i>jaagamidu</i>	<i>ažkii</i>	<i>piitaa.</i>
	<i>taroo=a</i>	<i>jaa=gami=du</i>	<i>ažk-i-i</i>	<i>pii-tar.</i>
	太郎=TOP	家=LIM=FOC	歩く-THM-SEQ	行く-PST
	「太郎は家まで歩いて行った。」[田平 2018:9(15)]			

8.2 名詞述語(コピュラ文)

名詞述語句は、名詞句(第7章を参照)とコピュラ動詞(5.3.2を参照)からなる構造を持つ。コピュラ動詞の出没について、下地(2018:235)によると、コピュラ動詞は、「(1)過去テンスを取る時、(2)否定辞を取る時、(3)従属節内(副動詞形を取る時)、(4)述語名詞句が焦点化される時、のいずれかの場合に義務的に生じ、(1)～(4)いずれも満たされない場合(非過去、肯定、主節、述語名詞句非焦点化)は出現しない。」という。

現時点では、新城方言では以下の例文が検証済みである。そのうち、(8-14d)に見られるように、述語名詞句が焦点化される時、コピュラ動詞の異形態 *jar* が生じる。下地(2018:192)によると、この異形態は定動詞直説法基本形非過去(肯定)と、条件副動詞、理由副動詞、逆接の接続助詞を取る場合のみられる。この点について、さらなる調査を行う予定である。

(8-14)	a.	<i>tarooja</i>	<i>siitu</i>	
		<i>taroo=a</i>	<i>siitu</i>	
		太郎=TOP	学生	
		「太郎は学生だ。」(非過去、肯定、主節、述語名詞句非焦点化)		
	b.	<i>tarooja</i>	<i>siitu</i>	<i>aran.</i>
		<i>taroo=a</i>	<i>siitu</i>	<i>ar-a-n.</i>
		太郎=TOP	学生	COP-THM-NEG
		「太郎は学生ではない。」(否定・主節)		
	c.	<i>tarooja</i>	<i>siitu</i>	<i>jaibadu</i>
		<i>taroo=a</i>	<i>siitu</i>	<i>jar-i-ba=du</i>
		太郎=TOP	学生=COP	COP-THM-CSL=FOC
		<i>tanumain.</i>		
		<i>tanum-ai-n.</i>		
		頼む-THM-POT-NEG.NPST.		
		「太郎は学生ではない。」(肯定・従属節)		
	d.	<i>taroo=ja</i>	<i>siitudu</i>	<i>jaataa.</i>
		<i>taroo=a</i>	<i>siitu=du</i>	<i>jar-tar.</i>
		太郎=TOP	学生=FOC	COP-PST
		「太郎はが学生だった。」(過去・述語名詞句焦点化)		

9 助詞類

新城方言の助詞は、格助詞、とりたて助詞、情報構造助詞、接続助詞、終助詞に分かれ
る。いくつかの助詞が並べる場合、以下の順に従う。

(9-1)助詞の相互承接

名詞句の主要部（格助詞）（取り立て助詞）（情報構造助詞）

述語の主要部（モーダル助詞）（接続助詞）（終助詞）

以下では、現時点で分かれる助詞について個別に述べる（格助詞は7.2を参照）。

9.1 取り立て助詞

取り立て助詞は、現時点で分かったものを以下にまとめる。

表 9-1. 取り立て助詞一覧

累加；譲歩	=mai	「も」
排他	=cjaai	「だけ、ばかり」

9.1.1=mai 「も」

=mai は累加(9-2)と譲歩(9-3)を表す。=mai は直接名詞句と動詞語幹に後続することができるが、格助詞に後続することもできる(9-4)。

- (9-2) a. *suumai* *žžumai* *fai.*
suu=mai žžu=mai fa-i- φ.
野菜=ADT 魚=ADT 食べる-THM-IMP
「野菜も魚も食べなさい。」（名詞に付く；累加）
- b. *karjaa* *pagžnu* *pjaamunu, aaguu* *ažžiimai* *zauzi.*
kari=a pagž=nu pjaa+munu, aagu=u ažž-i-i=mai zauz.
彼=TOP 足=NOM 早い+DHD 歌=ACC 歌う-THM-SEQ=ADT 上手
「彼は足が速くて、歌も上手だ。」（動詞に付く；累加）

- (9-3) a. *miinudu* *muzii* *sinbunnu* *žžimai* *jumarain.*
mii=nu=du muzii sinbun=nu žži=mai jum-a-rai-n
目=NOM=FOC 老眼 新聞=GEN 字=ADT 読む-THM-POT-NEG
「目が老眼で、新聞の字も読めない。」（名詞に付く；譲歩）
- b. *tauga* *sjaamai* *kaaran.*
tau=ga sjaa=mai kaar-a-n.

誰=NOM 来る=ADT 変わる=THM-NEG.NPST
「誰が来ても変わらない。」(動詞に付く; 讓歩)

- (9-4) *umakara miirubadu agatagamimai miiraipazi.*
uma=kara mii-ruba=du agata=gami=mai mii-rai=paz.
ここ=ABL 見る=CND=FOC むこう=LIM=ADT 見る=POT=LCTN
「ここから見れば、向こうまでも見えるはずだ。」(格助詞に付く)

9.2.2=cjaai 「だけ、ばかり」

=cjaai は排他を表す。現時点、(9-5)の一例しか取れず、詳しい用法は今後の課題とする。

- (9-5) *hanakonu sjukudaicjaai miitaa*
hanako=nu sjukudai=cjaai mii-tar.
花子=GEN 宿題=ONLY 見る=PST
「花子の宿題ばかり見た。」

9.3 情報構造助詞

情報構造助詞は、主題助詞と焦点助詞からなる。

9.3.1 主題助詞

9.3.1.1=a

主題助詞は=a で標示し、音韻規則によって=ja と=u (2.4.2 を参照) という異形態を持っている。なお、1人称単数に付く場合、予測の*ba=a ではなく、ba=ja=a(1SG=TOP=TOP)として実現する(9-6)。その原因について今後の課題とする。

- (9-6) *bajaa faan.*
ba=a=a fa-a-n.
1SG=TOP=TOP 食べる=THM-NEG.NPST
「私は食べない。」

日本語と同じく、主格・属格助詞と共に起する場合、助詞=ga が置き換え、直接名詞句に接続する(9-7)。

- (9-7) *karjaa žžuu faan.*
kari=a žžu=u fa-a-n.
彼=TOP 魚=ACC 食べる=THM-NEG.NPST

「彼は魚を食べない。」

主格・属格助詞と共に起する以外の場合は、主題助詞は格助詞に後続する。以下(9-7)は与格助詞+主題助詞の例である。(9-8)に示すように、与格によって標示する主語が主題化される場合、主題助詞が与格助詞の後に付く。

- (9-8) *taroonna* *tužža* *uran.*
taroo=n=na tuž=ža ur-a-n..
太郎=DAT=TOP 嫁=ACC2 いる-THM-NEG.NPST
「太郎には嫁がいない。」

9.3.1.2=ba

対格には専用の主題助詞=ba がある。下地(2018:243~244)によると、これは「日琉祖語の主題助詞*=pa にさかのぼる形式」であり、通常の主題標示にも、対比主題標示にも使われる。以下の(9-9)は対比主題の例であり、通常の主題標示の例はまだ取れていない。

- (9-9) *icimai* *žžuuba* *faan.*
icmai žžu=u=ba fa-a-n..
いつも 魚=ACC=TOP 食べる-THM-NEG.NPST
「いつも魚は食べない。」

9.3.2 焦点助詞

焦点助詞は文タイプによって、異なる形態をとる。現時点で、平叙焦点=du(9-10)、WH 疑問焦点=ga(9-11)が観察される。

- (9-10) *imnudu* *miirai* *uu.*
im=nu=du mii-rai ur- φ.
海=NOM=FOC 見る-POT PROG.NPST
「海が見え（てい）る。」 (平叙文)

- (9-11) *sjuuja* *nzankaiga* *ikadiga?*
sjuu=a nza=nkai=ga ik-a-di=ga?
お爺さん=TOP どこ=ALL=Q.FOC いく-THM-INT=Q
「お爺さんはどこに行くの？」 (WH 疑問文)

WH 疑問焦点=ga は WH 疑問文でのみ使われ、かつ疑問詞にのみ付く。手持ちのデータはすべて(9-11)のように、WH 疑問焦点=ga と疑問終助詞=ga 両方使われているが、文を疑問文化する機能は疑問詞にあるか、WH 疑問焦点=ga にあるか、それとも疑問終助詞=ga にあるかを知るために、さらなる調査が必要である。

宮古語諸語の先行研究(林 2013、下地 2018 など)が指摘している通り、新城方言も、焦

点助詞と命令文の共起が許容されない(9-12)。

- (9-12) *naaju(*du)* *kaki.*
naa=u(*=du) kak-i.
名前=ACC(*=FOC) 書く-IMP
「名前を書け。」(命令文には焦点標示不可)

下地(2018)によると、伊良部島方言はさらに Yes-No 疑問焦点=ru があるが、新城方言にあるか否かは今後の課題とする。

9.4 モーダル助詞

9.4.1=pazi 「はず」

=*pazi* は推測を表す。

- (9-13) *obaagadu* *soozzu* *siitaapazi*
obaa=ga=du sooz=zu sii-tar=paz
お祖母さん=NOM=FOC 掃除=ACC する-PST=LCTN
「お祖母さんが掃除しただろう。」

9.5 接続助詞

9.5.1 逆接=suga

=*suga* が逆接を表す。(9-14b)のように、主節を省略することもある。

- (9-14) a. *kunu mamaažža* *jasidaisugadu* *kagimunu.*
kunu mamaaž=ža jasdai=suga=du kagi+munu.
この あたり=TOP 安い=CNC=FOC きれい+DHD
「このあたりは安いけど、きれいだ。」
- b. *oi, hankacinudu* *utjuusuga*
oi, hankaci=nu=du ut-i-i+ur- φ =suga
おい ハンカチ=NOM=FOC 落ちる-THM-SEQ+PROG-NPST=CNC
「おい、ハンカチが落ちたけど...」

9.5.2 引用=tti

=tti が逆接を表し、発話動詞や思考動詞と共に起ることが多い。(9-15a)は思考動詞 umu-の内容を引用し、(9-15b)は軽い話題を提示する。

- (9-15) a. *jaaju* *vvaditti* *umuiuu.*
 jaa=u vv-a-di=tti umu-i-i ur- ϕ
 家=ACC 売る-THM-INT=QT 思う-THM-SEQ PROG-NPST
 「家を売ろうと思っている。」
- b. *vaaga* *mjuu* *sibaija*
 vva=ga mii ur- ϕ sibai=a
 2SG=NOM 見る PROG-NPST 芝居=TOP
 nauttidu *munurjaa?*
 nau=tti=du munu=rjaa?
 何=QT=FOC もの=Q
 「あなたが見る芝居って何？」

9.6 終助詞

9.6.1 疑問

9.6.1 wh 疑問=ga;=rjaa 「か」

WH 疑問文の疑問終助詞は=ga と=rjaa によって標示する。話者の話によると、=ga は男性が多用で、=rjaa は女性が多く用いる。イントネーションとして、語尾を上げるのが普通である。

- (9-16) a. *sjuuja* *nzankaiga* *ikadiga?*
 sjuu=a nza=nkai=ga ik-a-di=ga?
 お爺さん=TOP どこ=ALL=Q.FOC いく-THM-INT=Q

b. *sjuuja* *nzankaiga* *ikadirjaa?*
 sjuu=a nza=nkai=ga ik-a-di=rjaa?
 お爺さん=TOP どこ=ALL=Q.FOC いく-THM-INT=Q
 「お爺さんはどこに行くの？」

下地(2018)によると、伊良部島方言では WH 疑問を表す終助詞が必須でないというが、現時点で取れた新城方言のデータはすべて=ga または=rjaa をついている。この点に関しては今後の課題とする。

9.6.2 Yes-No 疑問=na 「か」

Yes-No 疑問文の疑問終助詞は=na によって標示する。

- (9-17) *vvaa aca ikadina?*
vva=a aca ik-a-di=na?
2SG =TOP 明日 行く -THM-INT=Q
「あなた明日行くの？」(Yes/No 疑問)

9.6.2 伝聞=ca 「そうだ」

伝聞を表す終助詞として, =ca が観察される。どれぐらいの信憑性を持っているかは, 未明であり, 今後さらなる調査を行うつもりである。

- (9-18) *sinsija eigonudu ažžaica.*
sinsii=a eigo=nu=du ažž-ai=ca.
先生=TOP 英語=NOM=FOC 言う -POT=HS
「先生は英語が喋れるそうだ。」

10 機能類：疑問詞・指示詞

10.1 疑問詞

疑問詞の体系を以下の表10-1に示す（?は未調査を表す）。

表10-1. 疑問詞の体系

tau	誰
nau	何
nza	どこ
ici	いつ
nau=tti	なぜ

以下、例を示す。手持ちのデータからみると、WH 疑問を表す焦点助詞=ga は随意的であり、文末の疑問終助詞は必要であるが、データが少ないため、話者に改めて確認する必要がある。

- (10-1) a. *tauga* *siiturjaa?*
tau=ga *siitu=rjaa?*
誰=NOM 学生=Q
「誰が学生なの？」
- b. *nauju* *mjuuga?*
nau=u *mii-ur- ϕ =Q*
何=ACC 見る+PROG-NPST
「何を見ているの？」
- c. *sjuuja* *nzankaiga* *ikadiga?*
sjuu=a *nza=nkai=ga* *ik-a-di=ga?*
お爺さん=TOP どこ=ALL=Q.FOC いく-THM-INT=Q
「お爺さんはどこに行くの？」
- d. *utsinaakara* *kisjuu* *funjaa*
utsnaa=kara *kis-i+ur- ϕ* *funi=a*
沖縄=ABL 来る-SEQ+PROG-NPST 船=TOP
ici=ga *pžsarankai* *cikžga?*
ic=ga *pžsara=nkai* *ck-ž- ϕ =ga?*
いつ=Q.FOC 平良=ALL 着く.NPST=Q
「沖縄から来ている船はいつ平良につくか？」[田平 2018:8(10)]
- e. *nauitti* *nakjuuga?*
nau=tti *nak-i-i+ur- ϕ =ga?*
なぜ 泣く-THM-SEQ+PROG-NPST=Q
「なぜ泣いているの？」

10.2 指示詞

指示詞の体系を以下の表10-2に示す（?は未調査を、{}は推測表す）。3人称代名詞がなく、その代わりに指示詞を使う。

表10-2.指示詞の体系

	近称	中称	遠称
代名詞	kuri	uri	kari
名詞修飾	kunu	unu	kanu
場所	kuma	{uma?}	kama

- (10-2) a. *kurjaan* *asikata* *njaan.*
kuri=a as+kata njaa-n.
 これ=TOP 仕方 ない-NPST
 「これは仕方ない。」
- b. *kunu* *sigamaau* *bantaaga*
kunu sgama=u ban-taa=ga
 この 仕事=ACC 1-PL=NOM
 「この仕事は私たちが一緒にしよう。」
- c. *kumankai* *kuu.*
kuma=nkai kuu.
 ここ=ALL 来る.IMP
 「ここに来て。」
- d. *urjaa* *ban.*
uri=a ban.
 それ=TOP 1SG
 「それは私だよ。」
- e. *unu* *fikuu* *aka+munu.*
unu fku=u aka+munu.
 その 服=TOP 赤+DHD
 「その服は赤い。」
- f. *karjaa* *žžuu* *faan.*
kari=a žžu=u fa-a-n.
 彼=TOP 魚=ACC 食べる-THM-NEG.NPST
 「彼は魚を食べない。」
- g. *kanu* *jaanna* *upuuupunu* *madunu*
kanu jaa=n=na upuu~upu=nu madu=nu
 あの 家=DAT=TOP 大きな~RED=GEN 窓=NOM
 aa.
 ar- ϕ
 ある-NPST
 無生物・肯定：「あの家には大きな窓がある。」
- h. *kamankaidu* *ikadi.*

kama=nkai=du	ik-a-di.
あそこ=ALL=FOC	行く -THM-INT
「あそこに行く。」	

宮古諸語における指示詞の使い分けについて、伊良部島方言では、現場指示の場合、近・中称 vs. 遠称の 2 項対立であり、文脈指示において、近称 vs. 中・遠称の 2 項対立がみられるという下地(2018)。池間方言では、「近称には *ku-u-* 系が用いられ、遠称には *ka-* 系が用いられる。照応には *u-* 系を用いるが、それ以外の *ku-* 系と *u-* 系の使い分けは未詳である。」という(林 2013:88)。

現時点では、新城方言の指示詞の体系を完全に整理できておらず、その使い分けは今後の課題として扱う。

11 構文論

11.1 文タイプ

11.1.1 平叙・疑問・命令

動詞述語の平叙文、疑問文(WH 疑問、Yes/No 疑問)、命令文の例を挙げる。

- (11-1) a. *bajaa* *sibaiju* *mjuu.*
ba=a=a sibai=u mii ur- ϕ
1SG =TOP=TOP 芝居=ACC 見る PROG-NPST
「私は芝居を見ている。」(平叙文)
- b. *vvaga* *mjuu* *sibaija*
vva=ga mii ur- ϕ sibai=a
2SG=NOM 見る PROG-NPST 芝居=TOP
naurjaa?
nau=rja?
何=SFP
「あなたがみている芝って何?」(WH 疑問)
- c. *vvaa* *aca* *ikadina?*
vva=a aca ik-a-di=na?
2SG =TOP 明日 行く -THM-INT=SFP
「あなた明日行くの?」(Yes/No 疑問)
- d. *sibaiju* *miiru.*
sibai=u mii-ru.
芝居=ACC 見る-IMP
「芝居を見ろ。」(命令文)

名詞述語の平叙文、疑問文の例を挙げる。

- (11-2) a. *bajaa* *siitu*
ba=a=a siitu
1SG =TOP=TOP 学生
「私は学生だ。」(平叙文)
- b. *tauga* *siiturjaa?*
tau=ga siitu=rja?
誰=NOM 学生=Q
「誰が学生なの?」(WH 疑問)
- c. *vvaa* *siituna?*
vva=a siitu=na?
2SG =TOP 学生=Q

「あなたは学生なの？」 (Yes/No 疑問)

11.2 肯定文と否定文

11.2.1 動詞述語の肯定・否定

動詞の場合は、否定接辞が用いられる。

- (11-3) a. *mccu* *ažkž.*
mc=cu ažk-ž- φ
道=ACC 歩く -THM-NPST
「道を歩く。」(肯定)
b. *mc=cu* *ažkan.*
mccu ažk-a-n.
道=ACC 歩く -THM-NEG
「(あまり) 道を歩かない。」(否定)

11.2.2 名詞述語の肯定・否定

名詞述語文の場合、コピュラ動詞を伴って否定を表す。

- (11-4) a. *tarooja* *siitu*
taroo=a siitu
太郎=TOP 学生
「太郎は学生だ。」(肯定)
b. *tarooja* *siitu aran.*
taroo=a siitu ar-a-n.
太郎=TOP 学生 COP -THM-NEG
「太郎は学生ではない。」(否定)

11.3 存在文

存在文は、主語が有生物の場合//ur-//を使い、無生物の場合//ar-//を使い、否定の場合//njaa-//を使う。

存在文における焦点助詞=du の出現は他の文より自由的である。以下の文は第一発話ではすべて=du 抜きであるが、=du を補っても文法的にも意味的にも変わりがないことが確認済みである。

- (11-5) a. *majunu(du)* *uu.*
 maju=nu(=du) ur- ϕ
 猫=NOM(=FOC) いる-NPST
 「猫がいる。」
- b. *upuu~upunu* *madunu(du)* *aa.*
 upuu~upu=nu madu=nu(=du) ar- ϕ
 大きい~RED=GEN 窓=NOM(=FOC) ある-NPST
 「大きい窓がある。」
- c. *zinnu(du)* *njaan.*
 zin=nu(=du) njaa-n
 お金=NOM(=FOC) RSL-NPST
 「お金がない。」

11.4 受動・使役

11.4.1 受動

能動文に対し、受動文では、動詞語幹に-*ari* という派生接辞を付ける。受動文では、被動者を主格で標示し、動作主を与格=n で標示する。間接受動は被害を表し、補助動詞 //njaa-//を伴うことが多い。

- (11-6) a. *tarooga* *hanakou* *mminzitaa.*
 taroo=ga hanako=u mminz-i-tar..
 太郎=NOM 花子=ACC 殴る-THM-PST
 「太郎が花子を殴った。」(能動)
- b. *hanakoga* *taroon* *mminzaritaa.*
 hanako=ga taroo=n mminz-ari-tar..
 花子=NOM 太郎=DAT 殴る-PASS-PST
 「花子が太郎に殴られた。」(受動)
- c. *tarooga* *taugaran* *saifuu* *nusimari* *njaan.*
 taroo=ga taugara=n saifu=u nusm-ari njaa-n
 太郎=NOM 誰か=DAT 財布=ACC 盜む-PASS RSL-NPST
 「太郎が誰かに財布を盗まれた。」(受動被害)

11.4.2 使役

使役の場合、動詞語幹のクラスによって、異なる使役接辞を取る。

クラス1 (母音語幹) の場合、-*simi* を付け、クラス2 (子音語幹) の場合、-*asi*をつける。非使役者を対格で、使役者は主格で標示する。

- (11-7) a. *tarooga ututuu niisimitaa.*
 taroo=ga ututu=u nii-simi-tar.
 太郎=NOM 弟=ACC 煮る-CAUS-PST
 「太郎が弟を (ものを) 煮させた。」
- b. *tarooga ututuu ažkasitaa.*
 taroo=ga ututu=u ažk-as-tar..
 太郎=NOM 弟=ACC 歩く-CAUS-PST
 「太郎が弟を歩かせた。」

11.5 情報構造

主題化された名詞句は基本的に、文頭に現れる。目的語以外の名詞句を主題化させる際には、主題助詞の=a を付ける。目的語を主題化させる際には、専用の主題助詞の=ba を付ける。

- (11-8) a. *urjaan ban.*
 uri=a ban.
 それ=TOP 1SG
 「それは私だよ。」
- b. *kunu sigamauba vvaga suuna.*
 kunu sgama=u=ba vva=g a suu=na.
 この 仕事=ACC=TOP 2SG=NOM する=SFP
 「この仕事はお前がするんだね。」

焦点を表す際には、焦点助詞=du が付与される。焦点助詞の接続は義務的ではない。高橋(2018)によると、存在文・天候文・現象文における焦点助詞=du の出現は他の文より自由である。以下は第一発話では=du がついていない例であるが、=du を補っても、文法的にも意味的にも変わりがない。

- (11-9) a. *majunu(du) uu.*
 maju=nu(=du) ur- ϕ
 猫=NOM(=FOC) いる-NPST
 「猫がいる。」(存在文)
- b. *aminu(du) ffuu.*
 ami=nu(=du) ff-i ur- ϕ .
 雨=NOM(=FOC) 降る-THM PROG-NPST
 「雨が降っている。」(天候文)
- c. *tidanu(du) agarii kžtaa.*
 tida=nu(=du) agar-i-i kž-tar.
 太陽=NOM=FOC 升る-THM-SEQ 来る-PST
 「太陽が昇ってい来た。」(現象文)

焦点化を語順で示すような手法があるかについてはさらなる調査が必要である。

参照文献

- 青井隼人 (2012) 「宮古多良間方言における「中舌母音」の音声的解釈」 言語研究 (Gengo Kenkyū) 142: 77-94.
- 林由華(2013)「南琉球宮古語池間方言の文法」博士論文, 京都大学.
- 平山輝男・中本正智 (1964) 『琉球与那国方言の研究』東京: 東京堂.
- 与那覇ユヌス (2003) 『城辺町スマフツ辞典』城辺町教育委員会.
- かりまたしげひさ (1986) 「宮古方言の「中舌母音」をめぐって」 『沖縄文化』 66: 54-64.
- かりまたしげひさ (1996) 「宮古方言の音韻変化についてのおぼえがき—空気力学的な観点から見て—」 『言語学林96-97』 709-722. 東京: 三省堂.
- かりまたしげひさ (2002) 「琉球語宮古諸方言の形容詞についてのおぼえがき—城辺町保良方言の形容詞の屈折を中心に—」 かりまた他編)(2002)『消滅に瀕した琉球語に関する調査研究』 44-69. 「環太平洋の言語」 日本班.
- 狩俣繁久 (2005) 「沖縄県宮古島平良方言のフォネーム」 『日本東洋文化論集』 11: 67-113.
- 衣畠智秀・林由華(2013)「琉球語宮古狩俣方言の音韻と文法」 『琉球の方言』 38:17-49.
- 金田章宏(2015)「南琉球方言におけるベシ由来形の分布とその周囲論的解釈」 中日理論言語学研究会, 2015-04-26.
- Martin, Samuel E.(1975) *A reference grammar of Japanese*. New Haven: Yale University Press.
- Pellard, Thomas (2009) Ōgami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū. Ph.D. thesis, École des hautes études en sciences sociales.
- Pellard, Thomas (2013) 「日本列島の言語の多様性：琉球諸語を中心に」 田窪行則編『琉球列島の言語と文化：その記録と継承』くろしお出版. 2013『琉球列島の言語と文化——その記録と継承—』 81-92. 東京：くろしお出版. <https://hal.archives-ouvertes.fr/hal-01289782/document>
- 崎山理(1963)「琉球宮古諸島方言比較音韻論」 『国語学』 54:6-21.
- セリック, ケナン(2017)「宮古語の「第二対格」は「対格」か？」 琉球諸語記述研究会 発表資料(琉球大学).
- セリック, ケナン(2018)「南琉球宮古語下地皆愛方言—簡略記述・談話資料・語彙集—」 『言語記述論集』 10:97-249.
- Shimoji, Michinori(2008) *A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language*. Ph.D. dissertation, Australian National University (published as Shimoji2017).
- Shimoji, Michinori(2009) The adjective class in Irabu. *Japanese/Korean Linguistics* 18:21-40.
- 下地理則 (2017) 「琉球諸語の代名詞：これまでの記述にもとづく類型化試論」「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」 研究発表会, 2017-06-11.
- 下地理則 (2018) 『南琉球宮古語伊良部島方言』 東京: くろしお出版.
- 高橋雅貴 (2018) 「南琉球宮古語新城方言のケースマーキング」 九州大学卒業論文.
- 田平 郁 (2018) 「南琉球宮古語新城方言の連体修飾構造」 九州大学卒業論文.
- Thompson, Sandra A.(1988) A discourse approach to the category“adjective”. In Hawkins, John, ed., *Explaining language universals*, 167-210. Oxford: Blackwell.
- 角田太作(2009) 『世界の言語と日本語: 言語類型論から見た日本語』, 東京：くろしお出版, 改訂版.

略号一覧

-:	接辞境界	LIM:	限界格
=:	助詞境界	NEG:	否定
+:	複合	NOM:	主格
1:	1 人称	NPST:	非過去
2:	2 人称	ONLY:	排他
ABL:	奪格	PASS:	受動
ACC:	対格=u	PL:	複數
ACC2:	対格=a	POT:	可能
ADT:	累加	PROG:	継続相
ALL:	方向格	PROH:	禁止
ASC:	共格	PST:	過去
CAUS:	使役	PURP:	目的
CNC:	逆接	Q:	疑問
CND:	条件	QT:	引用
CLF:	類別	RED:	重複
COP:	コピュラ	RFL:	再帰
CSL:	理由	RLS:	確信
DAT:	与格	RSL:	結果相
DHD:	準複合	SEQ:	中止形=i
DIM:	指小辞	SEQ2:	中止形=tti
FOC:	焦点	SFP:	終助詞
GEN:	属格	SG:	単数
HS:	伝聞	STA:	状態動詞
IMP:	命令	THM:	語幹拡張辞
INST :	具格	TOP:	主題
INT:	意志	VLZ :	動詞化
LCTN:	推測		

謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方々からの恩賜を受けましたことを、この場を借りて深く御礼申し上げます。

第一に、ご協力いただいた話者の方々、及び各集落の皆様に心より感謝申し上げる。特に、新城方言の話者の方には、たびたび長時間の調査に親切なご協力と熱心なご指導を賜った。宮古島での調査では、毎回の電話や訪問にも親身にご協力いただき、いつも温かく応援してくださったり、手作りの黒砂糖を贈ってくださった友利正純さん、いつも温かく迎え入れてくださり、誰よりも方言愛が溢れる新城悦子さん、初対面でも熱心にご指導くださった友利功子さんに、大変お世話になりました。いくら感謝しても足りない。そして、調査のサポートと調査場所までの送迎に加え、調査後には宮古じゅうをドライブにまで連れて行ってくださったり、宮古の様々な伝統や文化を教えてくださった仲間博之先生にも感謝申し上げます。

主指導教員の下地理則先生には、いつも熱心にご指導していただき、温かく見守ってくださり、心温まるご厚意に深く感謝いたしております。話者の方と下地先生がいらっしゃったからこそ、本論文を執筆することができました。

また、同じく言語学研究室の久保智之先生、上山あゆみ先生、太田真理先生には、授業の際に多くのことをご教授いただき、本論文に対する貴重なアドバイスをいただきました。誠にありがとうございました。

日本語を直してくださった斎藤靖様・斎藤浩子様ご夫妻にもお礼申し上げます。

同じく研究室の先輩方や、同級生の皆様からも励ましをいただきました。

最後に、中国から遠く日本へ私を快く送り出し、経済面のサポートのみならず、いつも温かく見守ってくれた両親に深謝する。